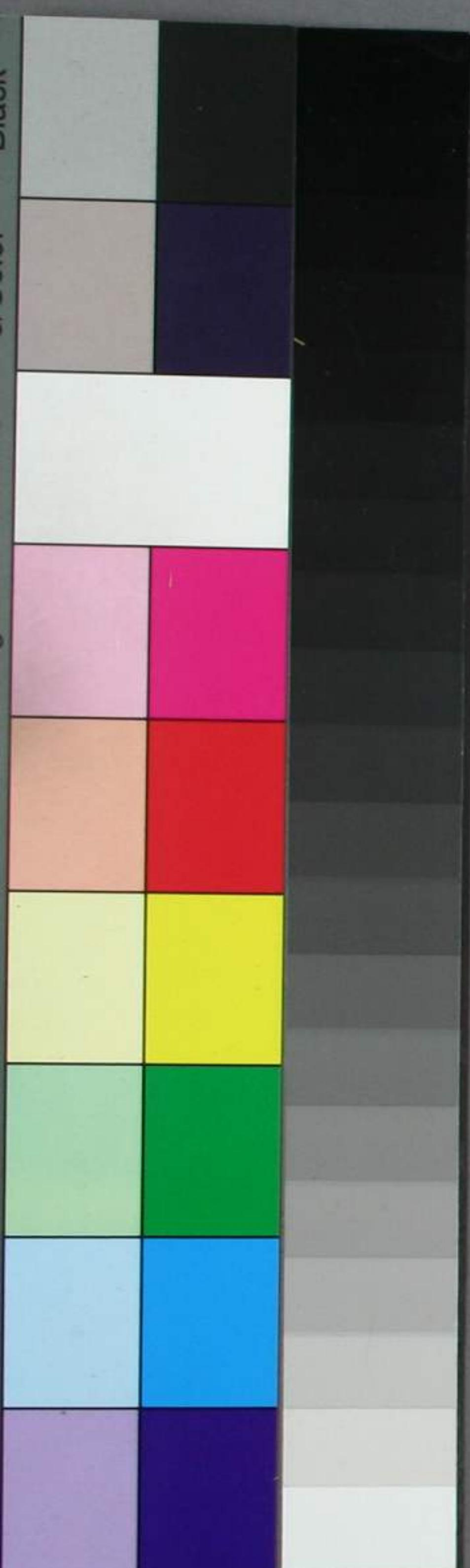
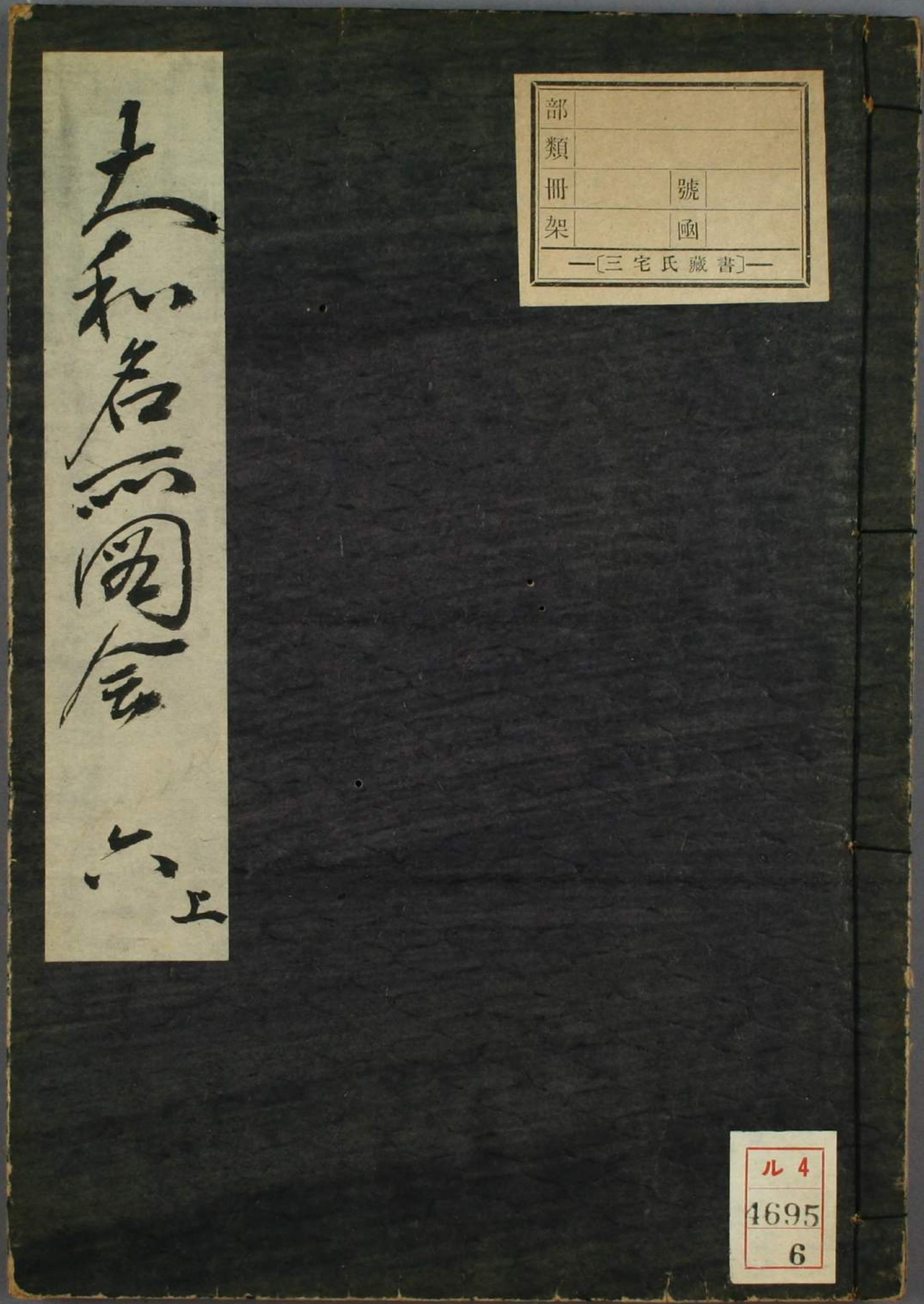


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN



門几
號 4695
卷 6

市郡目錄

所圖會卷之六

增賀墳
多賀峰
市郡目錄

櫟原川石
栗原陪社
安陪社
淡海墓
櫻橋
音
日人江
二階堂
龜船
栗宮
余比同
天香
稚櫻宮
名合
七井
玉穗宮
天皇陵
薄里櫻
崇峻天皇陵
兩櫻宮
用明天皇陵
加佐久曾山
聖靈院
若櫻社
東光寺
下居里社
下居里社
阿部文殊堂
市磯
土舞墓
香具離宮
天磐戶
安陪島
雙櫻官
山田寺
倉山
上宮
定慧墳
紅葉洞
彌社

早稻 大學 購入
號 36.6.21
藏 書

安嶋今神龜木社
願騎天神明井浦
本川樂師椿井

小牟漏岳
漏橋
吉魚張
寢橋
上鹿鹽社

鎧立東宇藥水井
岩興寺活向
大泊師邊
櫻井社

丹生祠國櫛莊
櫛船社

大泊師邊
櫛井社

高龜上秋川
龜上寺
龜分社

象耳我嶺
象尾山
象鼻川

遊副川
龍御門
法奧良家

多蘿山
土田川
蘿絳川

丹北漢水
夢回川
新漢水

象小川
花籠水
清流原
玉水龜宮古

竹院後坂
世尊牛頭大王
遙谷
巴窯
琵琶室
龍泉
大龍
跳塔
冷龍

椿寺
模觀音
高倉堂
岩倉谷
安禪寺
高倉堂
正善窟
官川
旭井
鎧光宅
情冷小所
鎧巖
正善井
正善窟

布院櫻
中院谷
金精社
高城山
人齊塚
青根我峯
金剛寺
聖天窟
釋迦窟
吉野皇居
白倉と
多賀谷
金龜窟
天窟

太刀子守社
金躡躍
蹠足
苔街
無名川
國見影石
大暮原
不動窟
鹽葉山
國見影石
太刀子守社
金躡躍
蹠足
苔街
無名川
國見影石
大暮原
不動窟
鹽葉山

鳳閣寺

後村上帝皇居

黃金嵩

丹生寺 鎮國寺

常學寺

後醍醐帝皇居

丹生山 丹生川

白銀嶽

丹生川

波寶社

丹生社

丹生寺 檜龍追川

丹生寺

檀鞍山

檀鞍山

檀鞍山

白爆布

白爆布

白爆布

白爆布

白爆布

白爆布

白爆布

白爆布

白爆布

稻邑山

稻邑山

稻邑山

稻邑山

稻邑山

稻邑山

稻邑山

稻邑山

稻邑山

高懸者嵩

高懸者嵩

高懸者嵩

高懸者嵩

高懸者嵩

高懸者嵩

高懸者嵩

高懸者嵩

高懸者嵩

寒流川

寒流川

寒流川

寒流川

寒流川

寒流川

寒流川

寒流川

寒流川

瀧尾社

瀧尾社

瀧尾社

瀧尾社

瀧尾社

瀧尾社

瀧尾社

瀧尾社

瀧尾社

高原山

高原山

高原山

高原山

高原山

高原山

高原山

高原山

高原山

憩風亭

憩風亭

憩風亭

憩風亭

憩風亭

憩風亭

憩風亭

憩風亭

憩風亭

柳池

柳池

柳池

柳池

柳池

柳池

柳池

柳池

柳池

本源門寺

本源門寺

本源門寺

本源門寺

本源門寺

本源門寺

本源門寺

本源門寺

本源門寺

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

現

善鬼里

蜃月巖

善鬼川

都藍尼



方子集

小夜文

かの

ゆふ

ひの

くわい

かの

ゆふ

ひの

くわい

かの

ゆふ

ひの

くわい

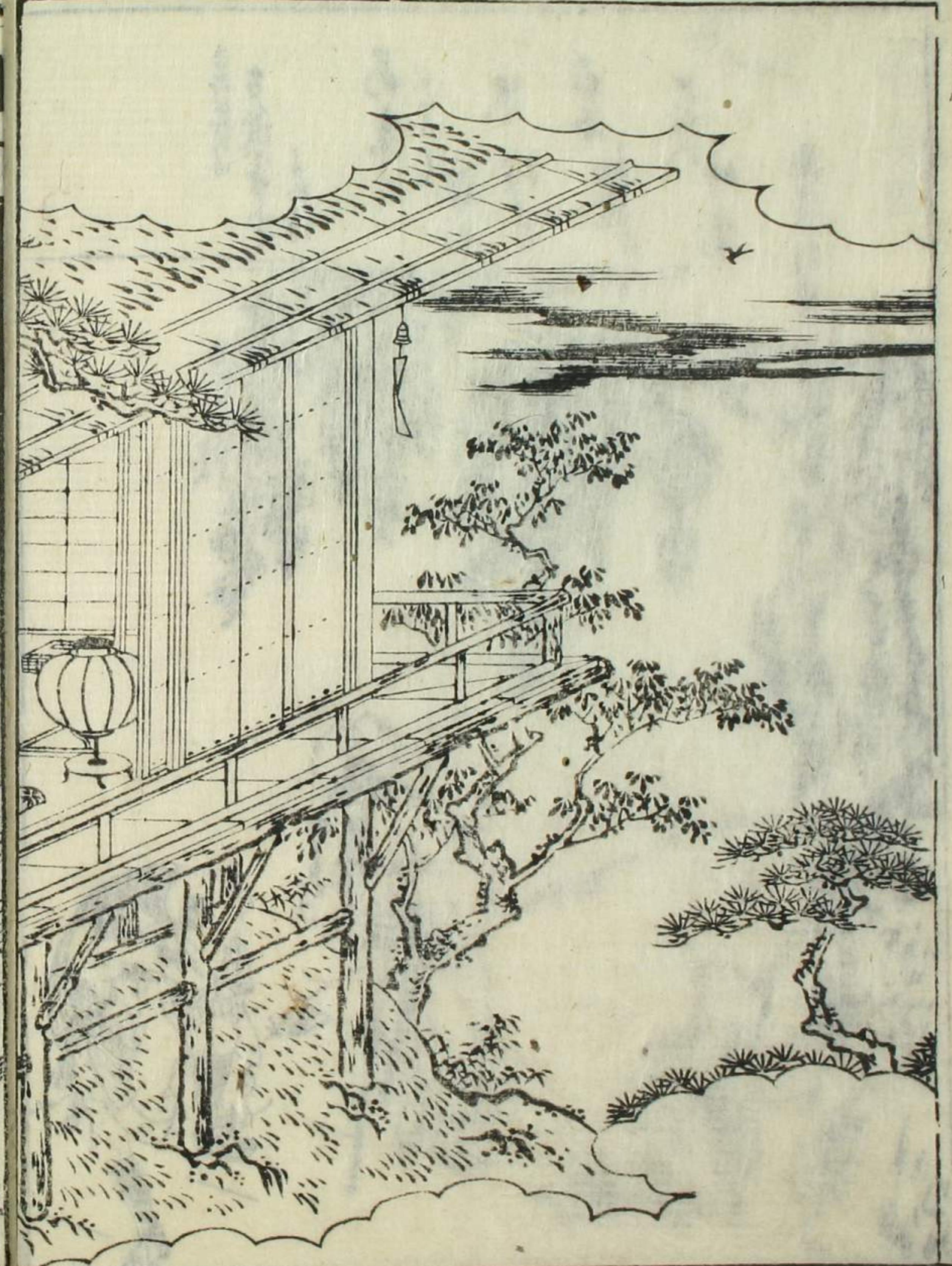
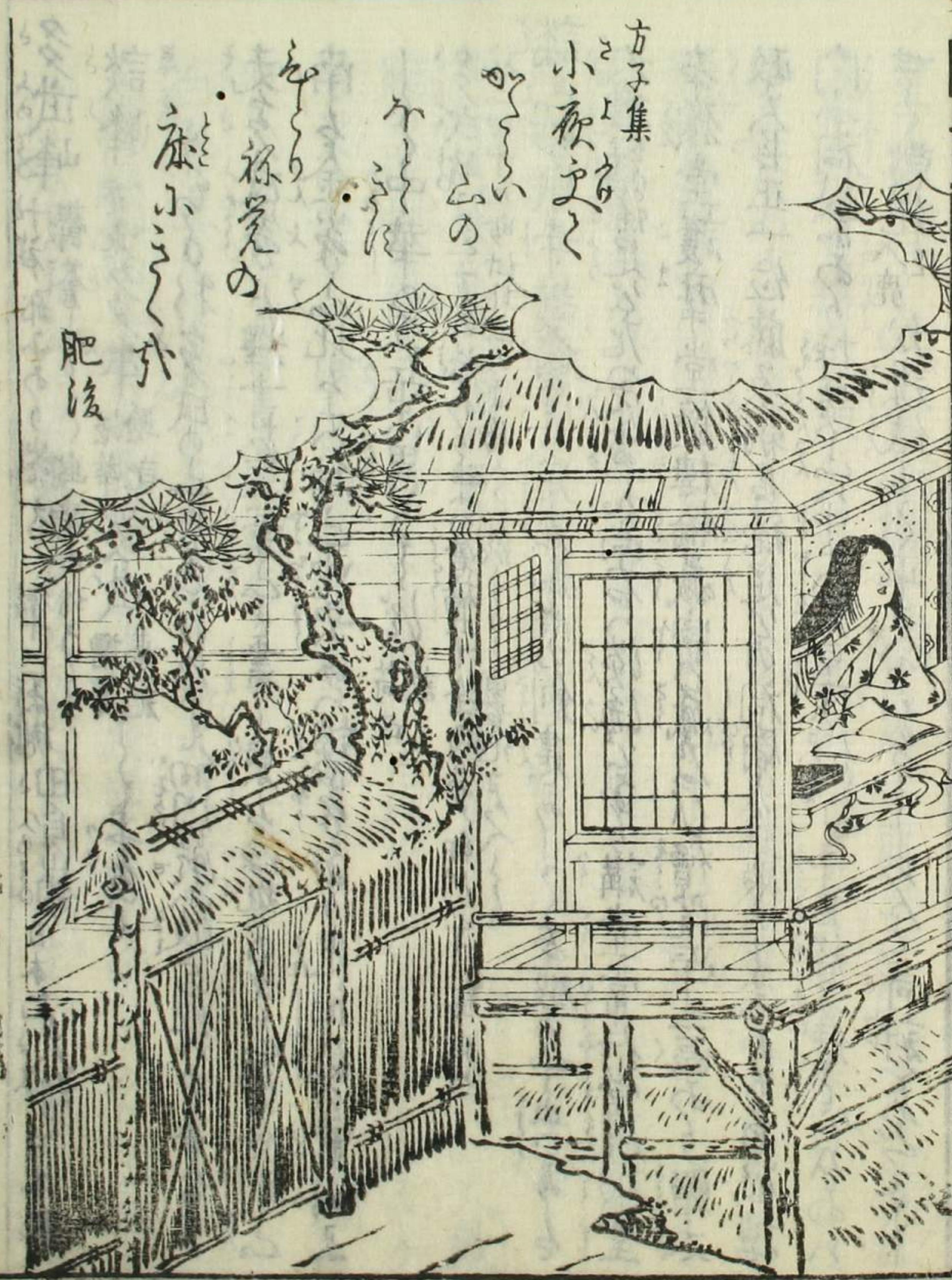
麻小

ゆふ

ひの

くわい

肥後



多武峰

七百石郡小より巻之巻
轍蒼山より此處の地より

談峰

蘇起多年驗記談武夢記

萬葉

うちわ多武峰の旁もげたる細川の所波打たる今ノ皇
支多岐を釋書に五墓と書東と伊勢の金剛山
南と金峯山と北と大神と中央の談峯あり足神仙の靈廟

中華の五岳小異

荷西記

多武峰三方の塔あり碑は倉橋五十餘町あひ細川一千七町北へ

談山妙樂寺護國院の定惠和尚の創建あり本殿の中央より
大織冠定公允の定惠和尚の淡海公あり講堂常行堂灌頂堂
本願堂護摩堂鐘樓輪藏寶藏及び僧院四十二區あり贈太
政大臣正一位藤原朝臣孫足公の祠廟と正殿の東小より歎櫻
内小祠あり才談山中大兄皇子天皇と平昌孫子連心があれ
せく鞍化臣皇帝が將城の東倉橋との間に登り藤の下みて擾乱
及正の謀が詫ひて白皇みて歎じゆくとあれ我大臣小羅らは
汝姓がわからぬとすと宣ふその談前より談峯あり
號をひけるとけ時談峰家とぞひ初とひ也記龍岳といふ
けのゆきか音不空とてアセラセラセラセラセラセラセラ
頭脳をもつた尾足をもつたあんむと云ふ名あり其家
十三重塔の定惠和尚の名割にて寺の名より昂底小大織
冠の遺骨を納り持めた塔は定惠和尚向徳四年にとみよふつゝ
塔の名より清涼山寶光院の十三層の塔と云ふ造りて塔の
船につまねりとくと塔の繁多ありと層と云ふと云ふ
白鳳七年九月日本小島岸わざく拂方不比多に附面ありと云ふ
大織冠和尚在唐の時薨せりと接津國の國主をうかりより父
より分かくりかひと和尚ひとひふ亡父の祠をすと和州談峯の靈

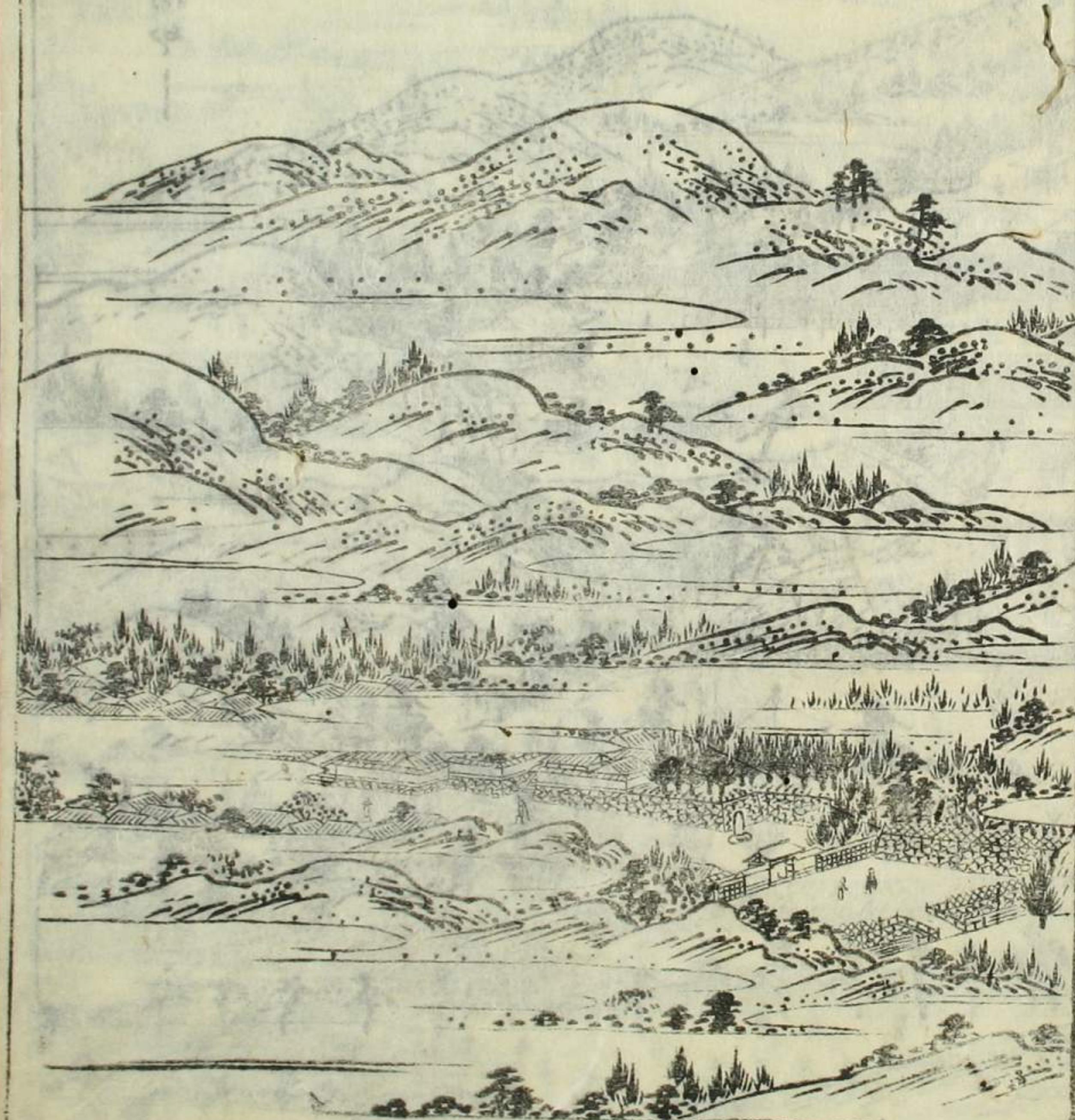
勝の區と爲シ五臺と小等して我と並べて小義もうばく孫益
クとばあどとありテ中華小ありては爰々あり我等も
談等に居て大織冠おほおりかんナシとせむしカ今天子生がうくす
也小堂塔といふと仏事と爲せよ其時己巳歲十月十六日夜二重之
不比號先君の薨せられと其年月日と爰の正と感應神が
ひくの志より和尚の威となり遺骸ゆいがいとて談等小院葬
マレル共に金剛の塔を建らる小一重不足と云げり乃ひ
と云うのみより塔材を小等ト風ふきゆく飛來りと云ふ
十三重塔成就じゅうさんじやくじょうと文殊菩薩と當化ありと安西經ひ
釋書せきしょ扶桑畧記談峯畧記

聖靈院ひより異光附かくぶ太本のやより小廻こまわと一より定あ和尚ニ
文の殿金蓋ごんあわ分建ぶつたて 荷西其後真昇大法師昌著貞信じんしん等とうアリ
一より中堂造なかどうぞうり 要大織冠おほおりかんの像ぞう近ちかに圓えんする男丸新造しんぞうり 荷西記

又檢校千滿法師仰化ぎょうけとすとより是老相傳曰え勇丸不送の像ぞう
千滿法師の法號ぼうごうはくし像中ぞうちゆう小取ことりく安善あんぜんへ神階じんかい正一位勳くん一等だい入延
長四年小次こじと榜題ぼうだいの勳號くんごうと賜たまア 荷西其後真昇大法師昌著貞信じんしん等とうアリ
毎小石碑こずい分建ぶつたて 荷西其後真昇大法師昌著貞信じんしん等とうアリ
日光御門主御筆近平安永丁酉歲三月路じゆ額がく 談峯大權現
始築はじつきちの昂聖靈院こうせいりやうと号くわく寂寢じくびの林利りんり心の日ひとみみり

香氣こうきを拂ほくと風かぜを拂ほくと樓ろう内軒うちけんと寶閣ほうかくと龕くらわん
くわくひも五六十の塔城とうじやくとて眼まなこが驚おどろ一格政いつくわ左倅さくわ定じょう
伊尹いその建たて常つねの時堂じまうの世よと被あつせば定じょう和尚の遺像ゐぞう
堂どう如實じつ僧そう都つゝの如實じつ堂どう村むら上天皇じょうてんのう勳くん額がく法事ほうじ麻ま堂どう接政せつせい右土人うどじん
伊尹いその曼陀羅まんだら堂どう融院ゆういんの勳くん額がく黃おう門もん堂どう座ざ主し真昇ましんの食堂くつどう等とう年
諸伽藍よくがらんと多武峯たぶほう記き小久こくより

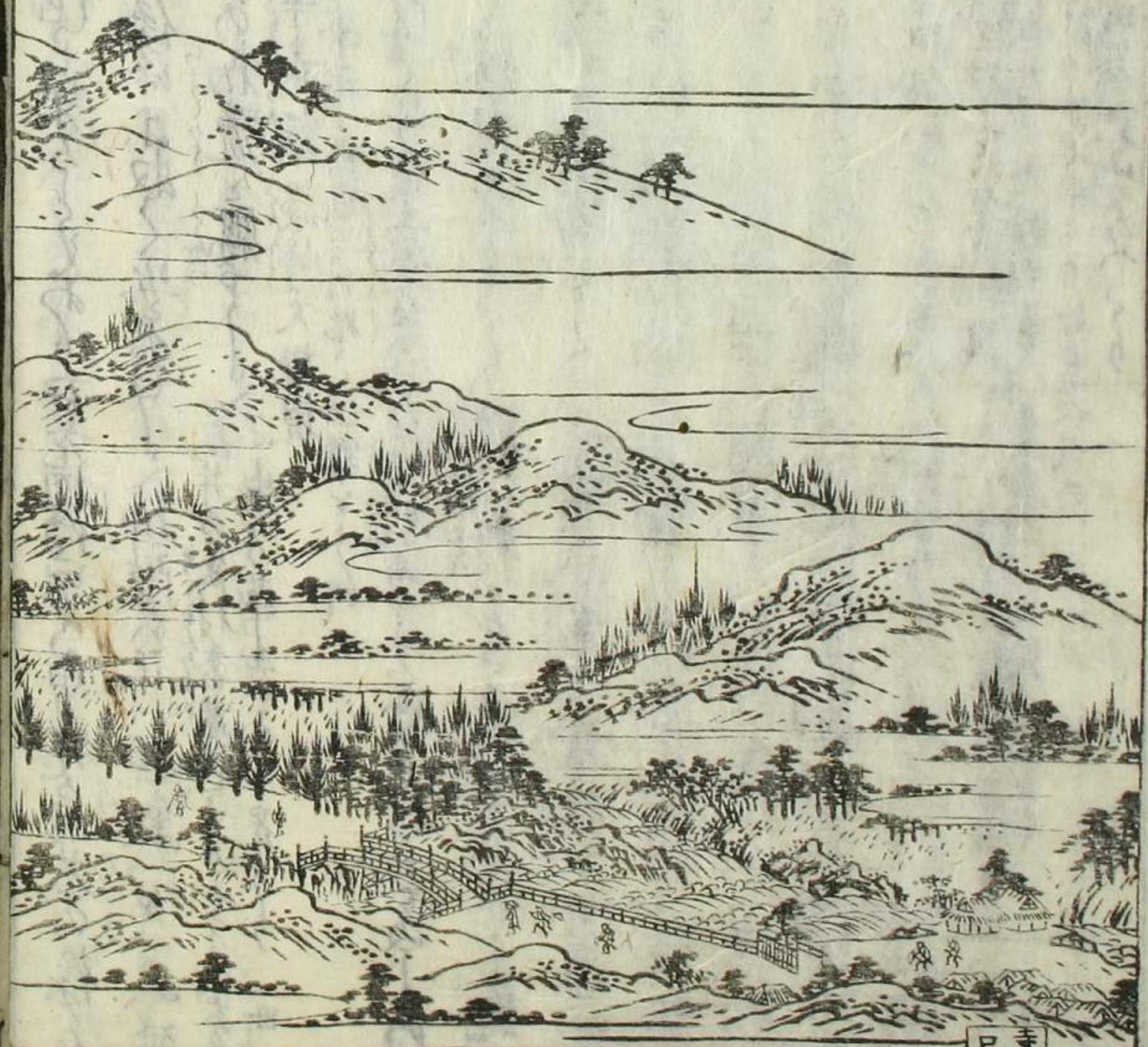
日本本草



多武峯

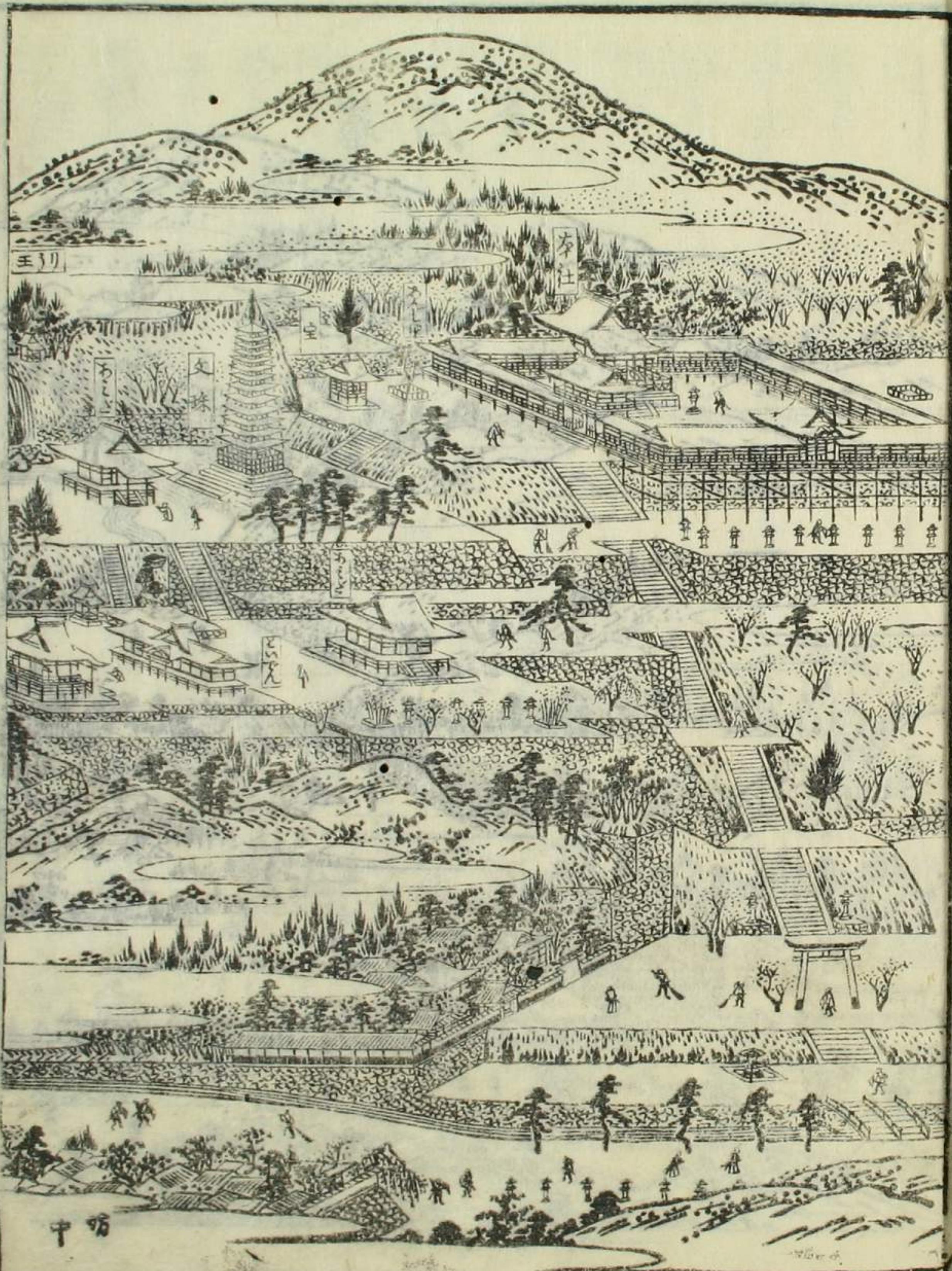
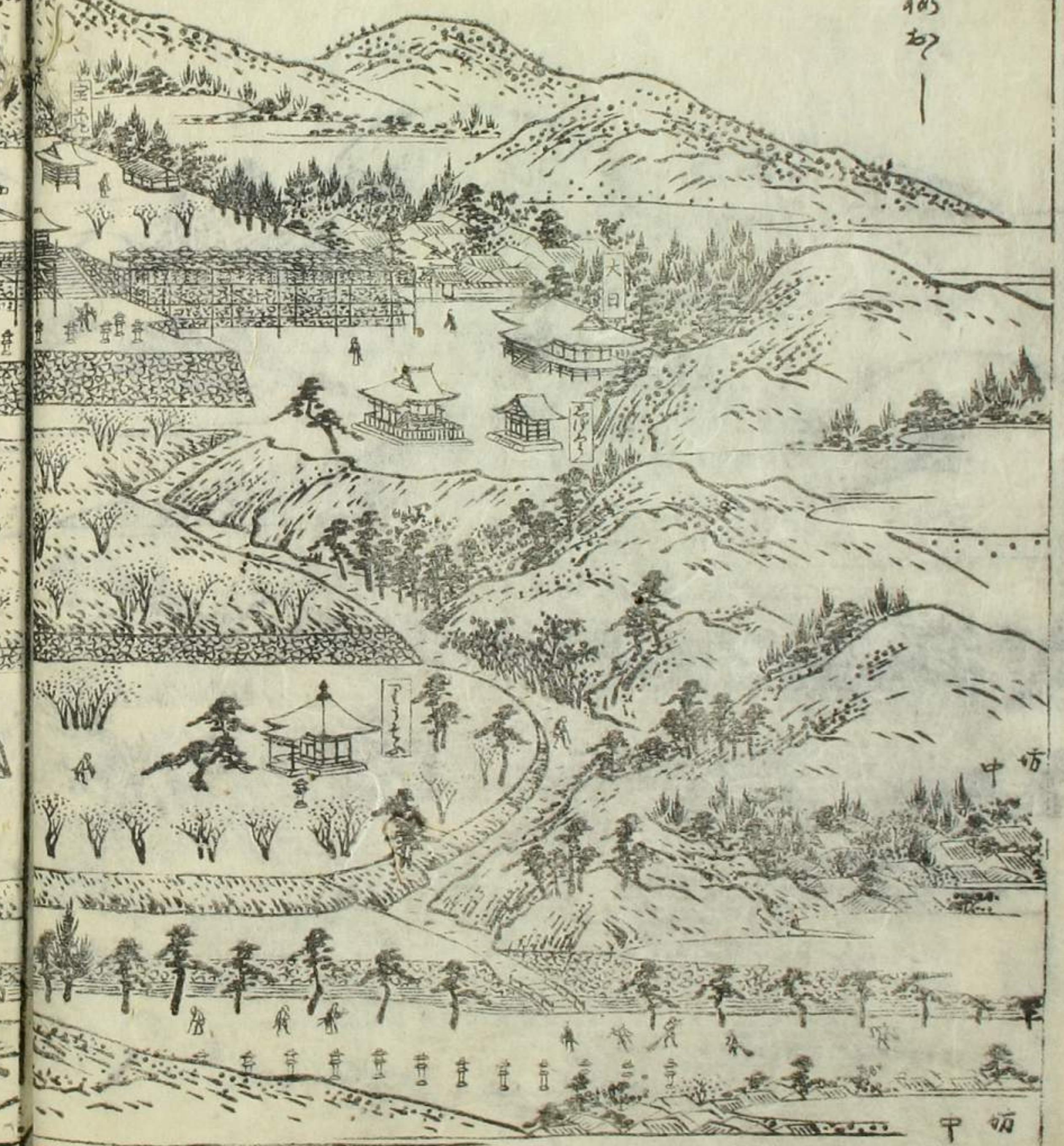
東門

日本本草
多武峯
東門



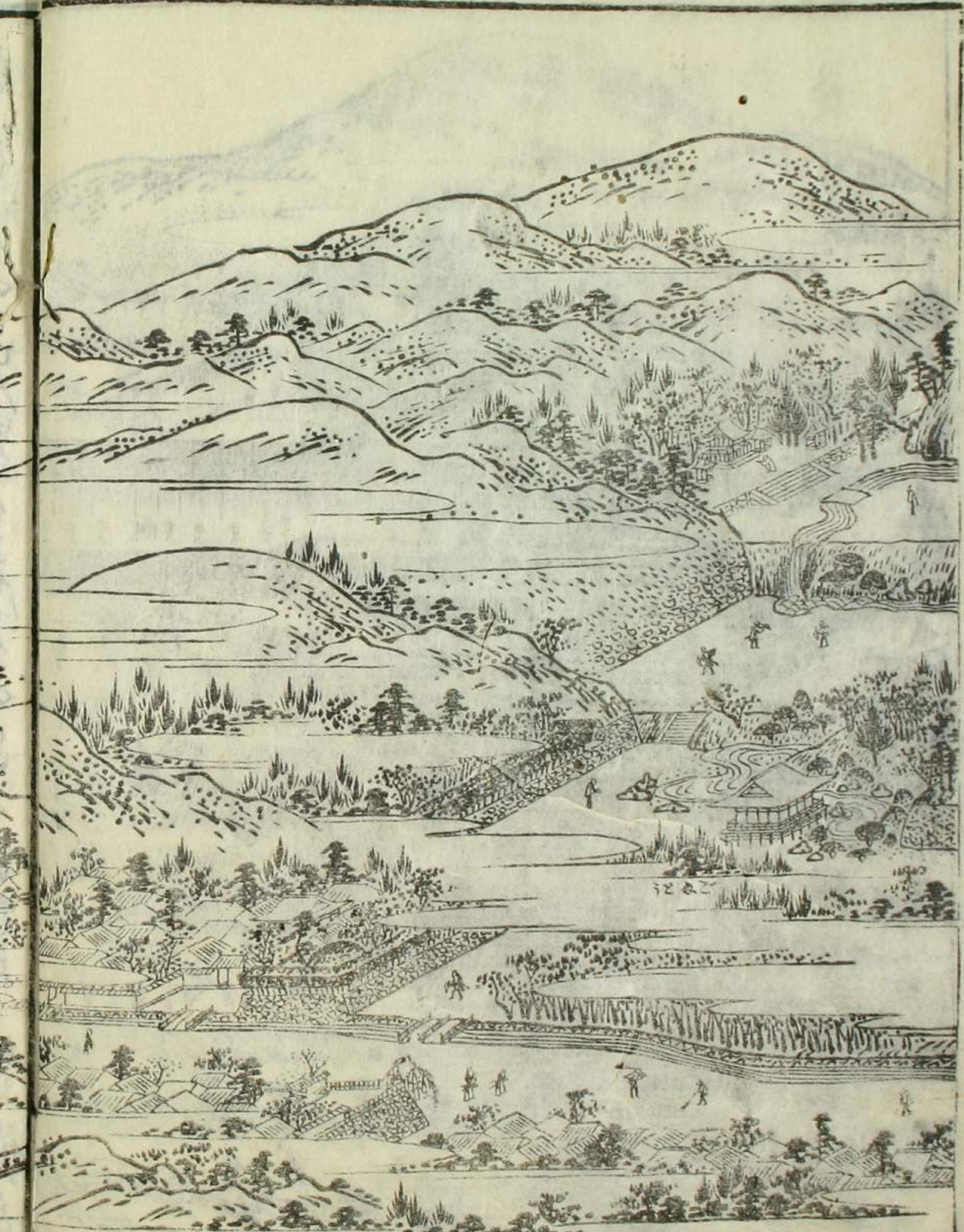
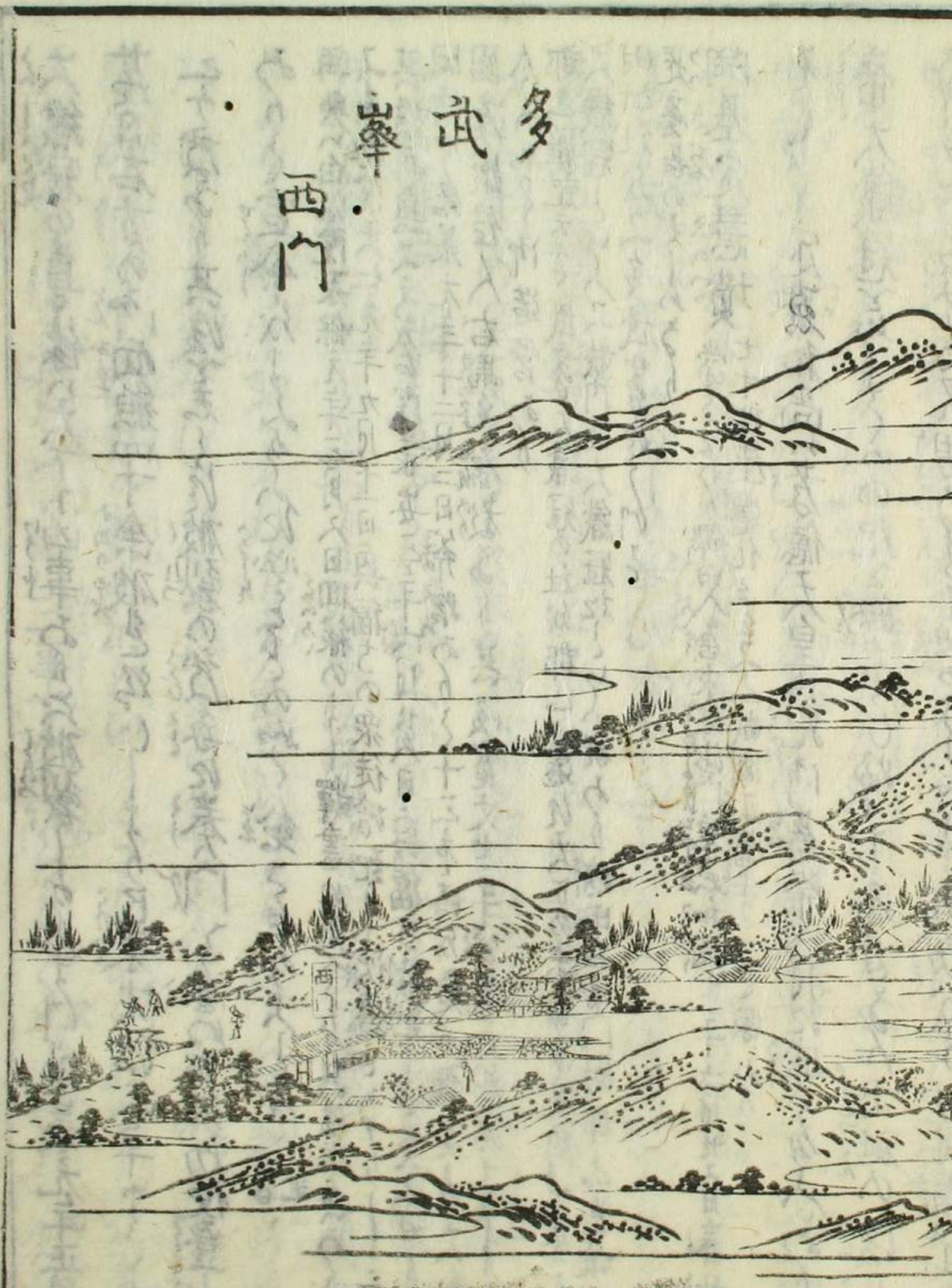
多峯本社

掲印一



多武峯

西門



大織冠の尊は像の天下小坐事あまた破壊され今所永樂元年正月
廿日右方の拂面鏡四寸余破れ給ひより已未文治二年十月
ニテ改めり其後をもて被裂の度毎に奏上と應の如く勅使登
ありと宣令がよしむるに心ととのぬく金をセリトモ

記

再興の白山院永保元年三月八日圓融のトリー（釋書にアトリ其後再興の
スを白院天仁元年九月十一日與福祐の衆徒起一（次書）
其後再興の又金院永安二年六月廿八日與福祐（次書）
同所宇治承元年十二月二日茶塔あり（十二月塔が建り額主も大和
國守兼僧侶人右馬允麻敷あり其後寛文七年公孫の公法

今めく所造當あり

郡と雜記云多武峯の大織冠の社分郡へ遷れ大正のまあり真新と今も

大織冠と云ふ城内と大織冠ねり樹あり源田右衛門尉郡山在城の

御社が又多武峯に在り

延慶長のくわうり

開基定慧墳（當すにあり碑曰入唐求法出定惠和尚七年六月廿八日春秋

七十弔座遷化云々又山城園木番寺とし據わり

そもく定惠和尚の考徳天皇の妃清看帶官に成りゆくあり
帝大織冠とくらきの妃と母をひゆ小えをあん出誕の後女
あらじ朕子とせん男をもゆくとせよとめ勅がうけ月滿の日

男子彦根と號く昂大織冠の子とせん夷源の子とがく

あらす定惠とをやた秋叶母車持夫人車持國子の女

贈賀上人墳（當すのナ上人の泰儀正四位下橘恒平の子とす）

利といとい檢官の昇進とのぞみかば或内論義の施りあり

みの乞巧人をもゆと争ひ金かとせんれたりと解小ちうり

益志の僧正小任すのあ駄にとて干鮭と左刀小もと骨うち

あら牛小のとあるとて太皇太后の戒受わんとあとを宮中

より麻語が咄く立せられ（拾遺）又佛の開眼小まつけをねく當つて

やくびて室（アシタ）とて其の正の後拂拂（アトリ）下向の道をくし直裸

小ありと歟（アヒ）とそれなり多武峯にこりかづる（アヒ）がえあやみのま

障泥と（アヒ）と拂拂の舞小神がひらく（アヒ）がえあやみのま

と乃のタヒ我初から時（アヒ）二事と小漣らとく止（アヒ）お一念法

アリスル事の生死の机とありとるせんと跡をもととるらとタ

長保二年六月八日小

み川二十度八十ばかりの老の波濤月の骨小ちひふうろくか
中も碌ドナ自ら金剛印分ひとび安祥とて終となり歿年鑑
三十三年分縫く廟とゆく小全身やぶすと色ど小變せざるゆめ

欽書往生作登心集

増賀行業記等不見

如骨禪師墳 錦盛塚おもてをあす俗小十禪師の又ハ九條右大臣藤原帥輔公
母延喜皇帝の皇女前齊宮雅子内親王うり童名を年まちあら若くそ
ウト生長たすひてはる光大將とよんじひきりとむわり人より
され小あいさりうりけつて車よりかづくぬとこぬぐみとたのく
たまがくくにかづてとらぬひづてをユ月の二日とすとそく
の月りそりくとんがアとねく

かくかほとくかなる中ひくとほくととく月の

ゆうふねひてその院に家へ生法師にうりかひふケリ帝もくみ
くわくとくせむく

都よりまの八木と利奥との横川内軒ひそよみく

九度のうちほほのと夜一とまめにをとくとく

うりの横川小をあせむひ一とくとく後うの多難事小をみむか一とく

した おとくくく

王集

松川の御事あ未意法師小告終ひた。

花夜うそと小名うそくわゑのや月がきらら

淡海公墓 多武峰の南東方計あり十三キ石塔が建

大和國十三郡名武峯】

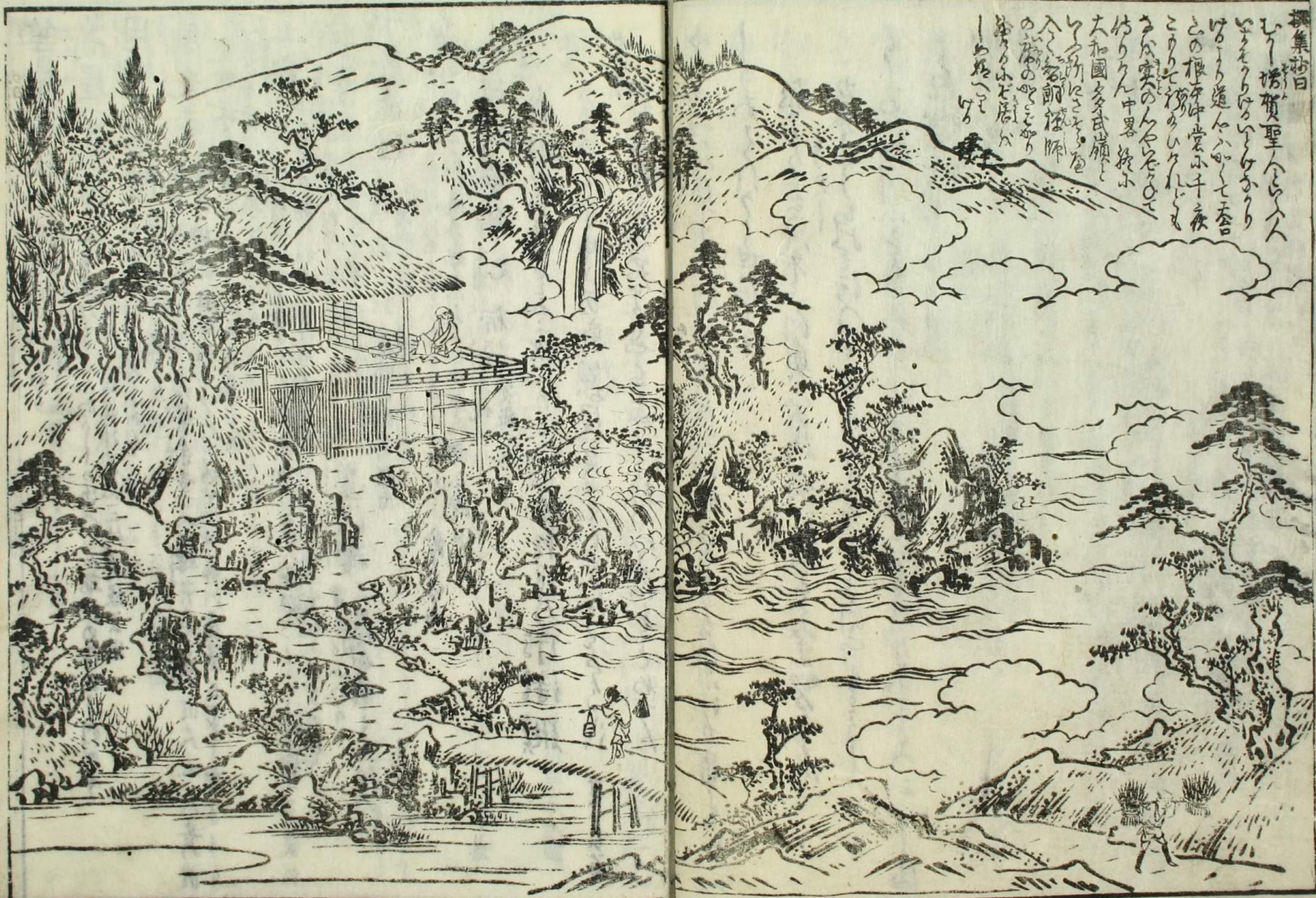
兩櫻宮院 武峯の西北小地名根櫻とて新あり此に

天皇大和國十三郡名武峯】

若櫻神社 楠井の谷邑小あり今白山權現と称れ

作名狀出

ひし
瑞賀聖人といふ人
がおもづらひてゆかうり
けろくろ道へひがそと杏
この根本中堂小千秋
こりりて移りしかれども
さぶ実のんやをみて
竹りくん中界後小
太和國多岐嶺
い所にさそる在
入く名前様跡
の處の跡をせり
華りふど周が
一山居へて



等彌神社 櫻井の谷邑の南小あり

今能河と称

高屋安陪神社 安倍ね本ふ小ありへ邊の若櫻社の傳也

用明天皇陵 谷長門二村の聚小あり

東光寺 櫻井村小ありひへ般余堂又ハ櫻井也

魏氏大永天正乃は
光明林くろ小よりくはうの名

委を東光寺小及く

上宮 楊井村小あり上宮をすの姓終ひ一歳其後ちとか一上宮と置

上官 上官の額へ後も別院の表額ありと今小上宮村小ありと也

栗石原山 売木村の上方小あり一名本村

墨染櫻 栗木村小あり

下居神社 下村小あり神名此二代実家出

倉櫻 日本倉椅 古事記 榆橋

三代 宮倉櫻村の上方小あり峯の名から小金と云

倉櫻

日本倉椅 古事記 榆橋

榆橋 日本倉櫻村の上方小かくもみだらけ八

拾坐 2月ゆきく榆との郭にちりりともみだらけ八 実方

三代實縁曰貞觀十一年秋七月八日十布都 榆橋山河岸崩裂高ニ丈

深一丈二尺其中有鏡一面廣一尺七寸採而獻之

榆橋川 城上郡とて入を入へ城上郡にかづれ入へ

崇峻天皇陵 倉橋村小あり宇ハ岩屋とて入へ陵圖考曰

崇峻天皇陵 高十三間廻十二丈廻四十三丈中石棺あり高三尺八寸長

ハ人模二尺七寸厚九寸鍊石より

岩屋のは一丈半

下居里 其所もくらむるの下居村とて前之いきをつくせ四季ふるき

くらむく殿苑ありケロと

七生抄小抄

高祖山 洛水村の上方小ありと年に

櫻石山 暴布あり其處に櫻石山と云ふ

高祖山 南洛水村小あり一名高祖山とす櫻石山應の地あり

高祖山

勝宝元年坐門心融の手創

七井 安部村小あり七井小源

井とすれ番味化小里也

東大谷

日女命神社 作名

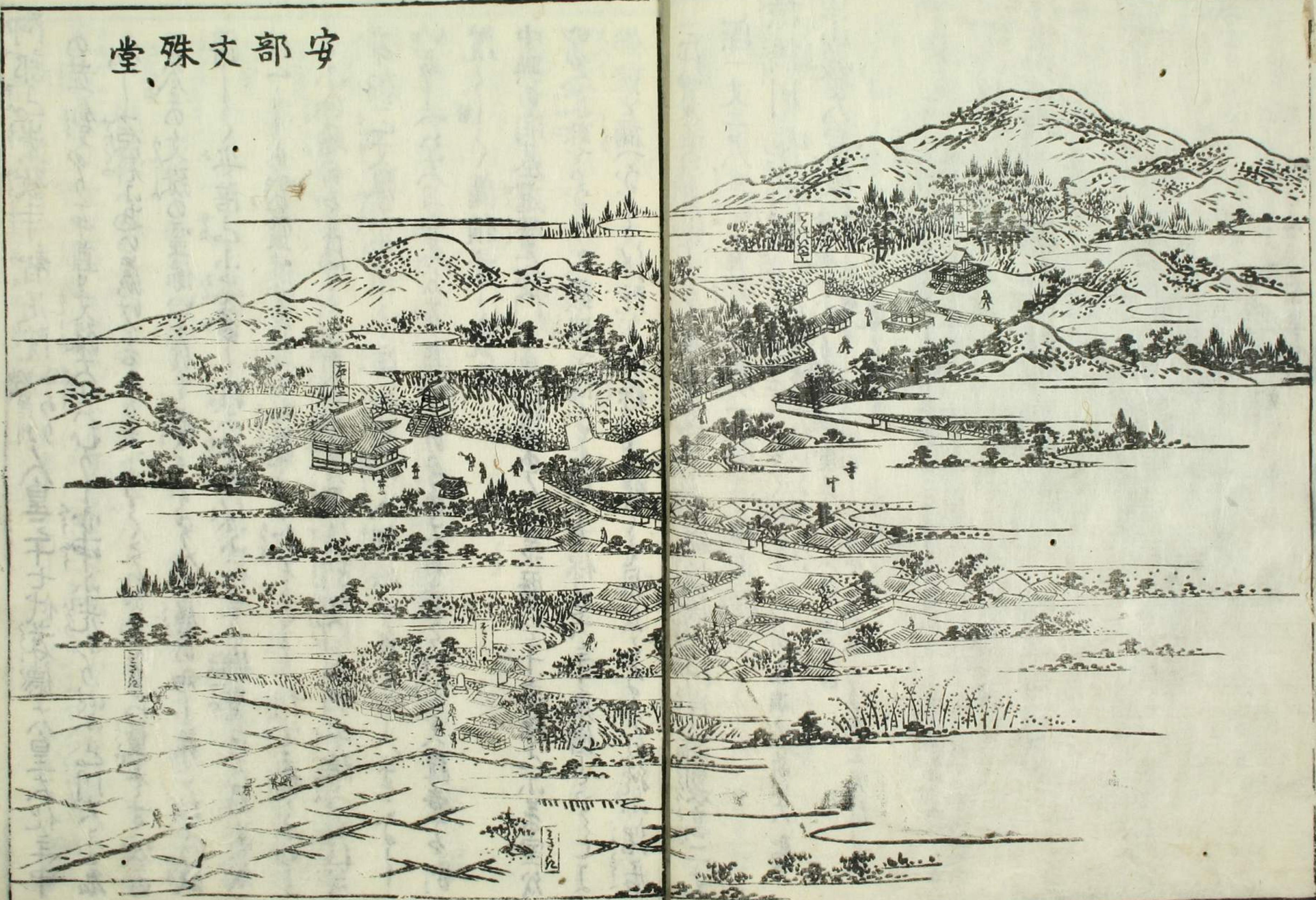
出

七井

安部村小あり七井小源

井とすれ番味化小里也

安部文殊堂



阿部山崇敬寺智足院僧人皇ニ十七代孝德天皇文化年中
の草創より本尊文殊大士ひし。室中少光ありは小門内小窟
石窟小の爲け者あり。すこしこれが少く量をす。分の
美金の文殊の坐像。温うるゝ人の膚の如一尋。かく感
深く。安陪と小安陪。後小安。ゆゑに。佛量力。乃。像
はく。如の靈像。眉間小影龕。うり。そき。利生處。く。小
小効驗。日々みゆ。と。奥。永井丹。後。列切門。和列。安陪。と。名
本朝。文殊大士。と。遠近の游人。唱作。せん。とい。人半。か。
い。大日如來。本尊。と。今の大日堂。それ。文殊堂。と。別
院。と。滿願寺と號。

中興の開基。運覺。宝門。と。豊後國の人。之。崇曆二年。安陪と。小室。分
ゆ。前此。と。かく。又。頭客。と。かく。と。保延六年。衆僧。と。と。と。よ
佛號。と。爾。かく。你陀。分。膳。作。と。嘗。く。も。肩。か。と。と。と。ば。後。小。榜。居

入寂。す。其後。二十七日。分。絰。ゆ。と。も。仰。り。更に。み。れ。と。遺言

小志。う。と。佛堂。の。下。小納。うち。肉。身。や。ど。と。ば。今。ア。い。ナ。ド。ト。

釋書。小。ア。ス。ト。リ。 千一
文殊大士。天。游。り。お。ひ。一。石窟。と。堂。の。異。小。ア。

拔。捨。星。

續。捨。星。

秋。う。花。浮。小。う。み。せん。熟。か。く。い。の。所。乃。秋。の。夕。と。日。本。紀。用。明。天。皇。元。年。磐。余。雙。

續。後。捨。星。

あ。く。小。の。磐。余。所。の。の。女。帝。花。う。ま。う。く。三。モ。盈。於。病。引。 漢。人。ふ。知。

彰。捨。星。

鷦。鷯。の。ち。れ。の。妙。の。林。と。と。と。と。と。み。つ。り。と。く。 漢。人。ふ。知。

王。穗。宮。歌。皇。廿。七。代。繼。體。天。皇。ハ。樟。葉。宮。ア。と。昂。位。ア。リ。と。同。御。宇。ヘ。年。」

「。」。歌。ア。ス。廿。年。九。月。大。和。國。小。川。一。ツ。ら。と。磐。余。の。玉。穗。宮。

と。お。づ。け。て。の。ひ。タ。リ。日。本。紀。小。ア。ス。ト。リ。



土舞墓

後門材の下から小えひにありては土舞墓といひ橋井乃町れ
といひ人推古天皇廿二年百濟國より味摩之とらへ人來朝せり又うる御翁公
出でく是國の妓樂が舞闇よりとありてはふと勅へく御翁公
あらわ橋井村ありとあらへと

阿倍

夫本集小太和國又は倍橋のゆゑとく
方集詞林採集小刀久く

五妹 子小不相久一も馬下比阿倍橋の蘿のすゑと

安倍島

勅撰名新集末勅國之云

續

あべのとれ岩の行友とく今夜の月のさやけと あ家

風雅

玉晴方あべの夕の夕の旅愁の外もさけ夜分 傷念をば
新便

郭

郭也と付もくとくあべの安船の為と病ひかくして 痘を通異

雍栗木宮

清寧天皇磐余雍栗木宮小昂位くわいノ御津紀小刀久く

白香谷

御御厨子邑くわいノ帝王編年日十市郡白香谷足ありとを
白香谷も城上郡小わら

稚櫻宮

沈内村くわいノ稚櫻宮とくへ屢中天皇もくろづき、昂位くわいノ御
後人こうじんわくまく小せうへ

十月磐

余小皇子が造り爲ひと蟹年かにの十月磐余の御磐沈小
は沈内裏くわいノ兩枝舟ふたえふね

花

花もくとく御さぶさにううとけたいたくとりありケラビトナアリ
花もくとく御さぶさにううとけたいたくとりありケラビトナアリ

一

クハ長真膽速ひとくりたがるのありてと様上の室よのま

櫻

さくらむすりたてとらへてとくの小真せうを敷感ゆおもえとく稚櫻宮

官

の名みそり一け

夫本

櫻ちの室のと風吹ぬとく御磐の沈くわいノ余の波 定圓

香久

と興善寺文殊院くわいノ戒下村くわいノ天照大神あめのそめ也小わらく松法乃

要

公現一國くわいノ福一民くわいノ益一若くわいノ與くわいノ故小號くわいノセリ奉尊くわいノ

文殊

大士くわいノて安らくわいノ化くわいノ中興くわいノ開基くわいノ隆俊くわいノ上人くわいノ豊臣秀吉くわいノ

より

人くわいノ首くわいノ賜くわいノとあん加藍くわいノ開基くわいノ記くわいノ

二階堂

天くわいノ香久くわいノの小表くわいノとく名くわいノとぞうりありむくわいノ二階堂くわいノ

わまさかくやま
大香久山

千載賀

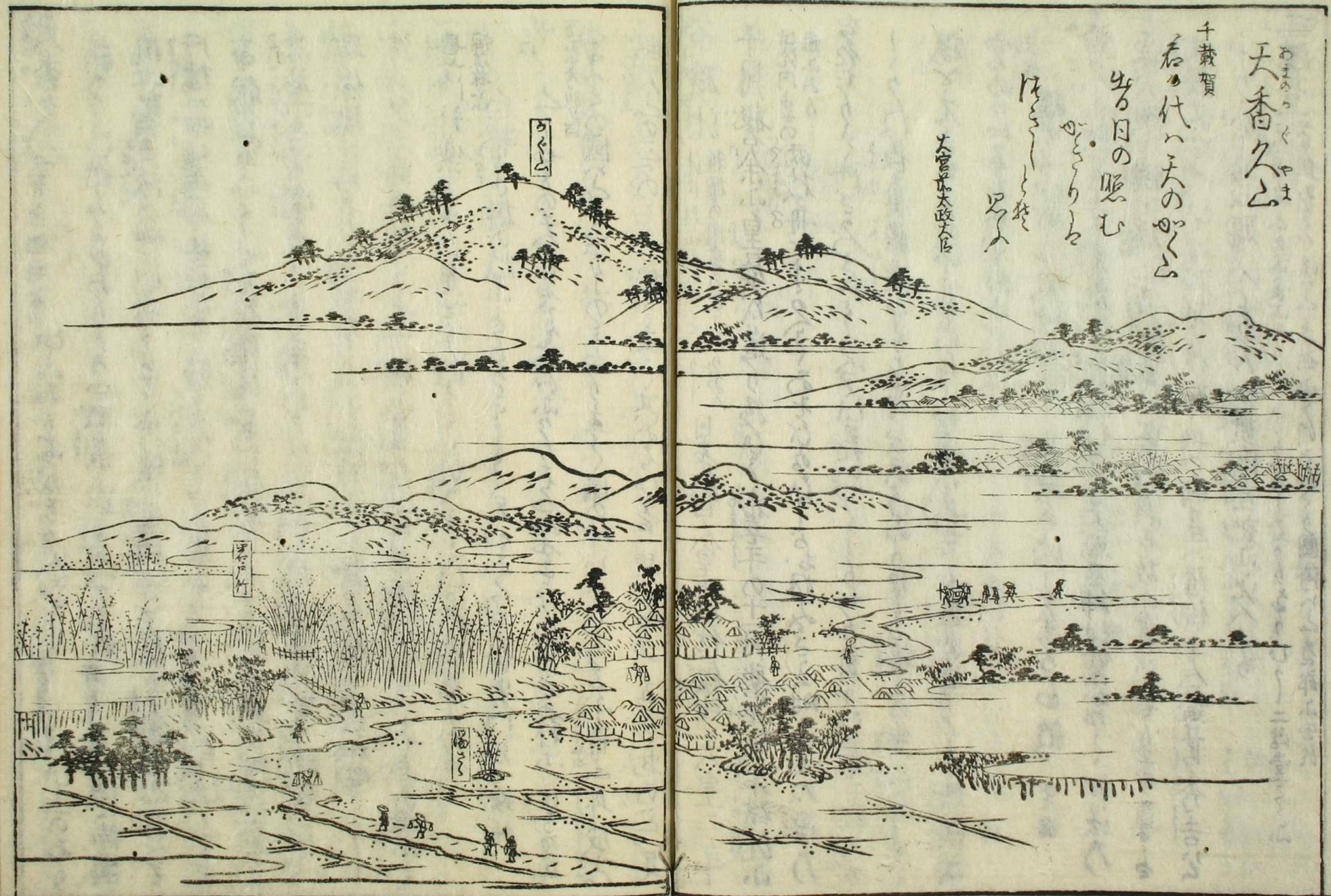
右の代へ天のゆく

先の日ひ照む

かみりゆ

はるかと秋

太官長太政大臣



天香久

範兼卿類聚曰

しとあり亦がある人か

澄月哥捨曰

しのあり

新ひ竹のあらとうや披病ひびき小あらとう

釋日本紀曰 伊豫國

風土記曰 天降の時二門がつゝとく行端ゆきの倭國しづくに小さくあり天香久

行端ゆき伊豫國いよ伊豫郡いよ小さくは天あまとて定あり 詞林採葉曰 九けふと

本朝の西亞アフリカにて左所陰陽家にめはせらるて天照大神アマツシマヒ岩窟イハ

幽居アヒト六合常割アラタツみへて畫夜アマテラス高皇產靈神カクミンジン八百万神ヤシマツノミが天あまに

瑞像鏡アマテラスがわさくめ麻アマ幣ヒサギ穀エコ木キがう白和幣シロハヒサギ

足アシ本締アシタマの初ヒトて一夜小蓋アヒタマ并アヒタマの儀式アヒタマにて今アヒタマの世アヒタマも

豊布アマテラス補樂アマテラスとアマテラス足アシタマ引アシタマひろくアシタマけころがよろ

洞珠アマテラス向幣アマテラスと林アマテラス枝アマテラスとなりうるアマテラスやあらるる岩門アマテラスが 跳仲

ノア考別書
天アマテラスの國アマテラスとアマテラス方アマテラスのとアマテラスり立アマテラス國アマテラスの中アマテラス車アマテラスをアマテラス小香アマテラスと耳成アマテラス

敵火アマテラスのとアマテラス名アマテラス鳴アマテラス其アマテラスわちの名アマテラス一里アマテラスをアマテラス五アマテラスくあること定

みアマテラス一反アマテラスの宮アマテラス所アマテラスけこのよアマテラス中アマテラスく香アマテラスよりアマテラスそアマテラスを敵火アマテラスを

高く耳成アマテラスそとアマテラス次香アマテラスよりアマテラス中アマテラス低アマテラスれど形アマテラス富士アマテラスのアマテラスがアマテラス化アマテラスれる

ぬアマテラスいみアマテラスとアマテラス方アマテラスの林アマテラス廣アマテラスく本アマテラスをアマテラスげアマテラスくアマテラスそアマテラスあアマテラスつアマテラスひアマテラスてアマテラスる

あアマテラスりアマテラスとアマテラス夜アマテラスの香アマテラスとアマテラスみアマテラスりアマテラス、そアマテラスそアマテラスじアマテラスのアマテラス敵アマテラス尾アマテラスの形アマテラスうアマテラスらアマテラスありアマテラスる

そアマテラス敵アマテラスのアマテラス二町アマテラスの方アマテラスをアマテラスりアマテラスの池アマテラスあり足アマテラスそアマテラスの埴安アマテラスの池アマテラス乃

浦アマテラスの浦アマテラス八町アマテラス東北アマテラス小池尾アマテラス村アマテラス人里アマテラスの今アマテラスあるとい

みアマテラスへアマテラスのアマテラスあアマテラスぐアマテラスそれ後アマテラス小池アマテラスのアマテラス人尾アマテラスが崩アマテラス一池アマテラスが

埋アマテラス田所アマテラス里居アマテラスとアマテラスかアマテラスのアマテラス川アマテラスをアマテラス小共アマテラス江アマテラスあアマテラスりアマテラスてアマテラス登アマテラスもアマテラス國アマテラス見アマテラスとアマテラスいアマテラスんアマテラスのアマテラス小共アマテラスのアマテラス川アマテラスをアマテラス小共アマテラス江アマテラス今アマテラスあアマテラスけアマテラスい

そのむアマテラス五アマテラス人アマテラスのアマテラス小共アマテラスのアマテラス末アマテラスおアマテラスとアマテラス新アマテラス少アマテラスく異國アマテラスのアマテラス神アマテラスの名アマテラスとアマテラスす

社アマテラス是アマテラスかアマテラスの天澤アマテラス女アマテラスの神アマテラスおアマテラスやアマテラスとアマテラス花アマテラスの神アマテラス主アマテラスひアマテラスりアマテラス也アマテラスと

以の久名うら香久山を極いとる歌べしとぞ小忍ひさりとぬくは
 國(りく)をすくいよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとす
 すよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよ
 すよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよと
 すよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよと
 すよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよと
 すよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよと
 すよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよと
 すよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよとすよと

夕人狀を舉くいみへ志のばん小竹へ侍るへ

ス或書ニ古老の日多々武家の東にあらわく高とあり俗らながる心とけとの餘
 残小春羽村わら古来の大香久山にけを知るのみ今の香久山もひそく小山と
 くらみへより續りゆきの様もふて大香久山といきくへくわいとてうるわいの
 これと低くうらぐさきやうかへる見の名跡とくもじよちよとくみやうとも今も
 ちくしうちくとよみへを今も残山うり是がおりて大香久山と今の言
 万葉のうみうみべへと云え

夕人状を舉くいみへ志のばん小竹へ侍るへ

詞名
 壬子の向まゆけせ山ゆえあらえる三日をみ一ヶ 大和嘉吉

18

新

院
 製

十度うら夕をとへるの天井がとくもゆられゆ 後類新詩

18

院
 製

かうの天井山とくもゆられゆの天井がとくもゆられゆ 後成

18

院
 製

久きの天井山とくもゆられゆの天井がとくもゆられゆ 堅義謹

18

院
 製

久方の天井山とくもゆられゆの天井がとくもゆられゆ 定家

18

院
 製

久方の天井山とくもゆられゆの天井がとくもゆられゆ 家隆

18

院
 製

代より年つて腰くと月日はとて天乃ゆくと 正三位家家

18

院
 製

香具山離宮 天香久山のあおせ一代集の内丸三十首より
 香久山の神社の地に傍ぶ瀬越わり遊戯の能とし

18

院
 製

大般若 湯釜 大香久山のあおせ一代集の内丸三十首より
 出浴湯母か用ひのそねかくも 天香具山の洞と辰く日像鏡と鑄

元元集目

天香久山の竹が竹笛を送。

耳成山

山中小施樹

かのへけり人に

くちかへ



喜多
詠歌

とくの
くらか

えでや

ゆれえの

ト擦れ
せん



天香坐櫛真命神社

香具山北の村小ありあ浦村小屬を北浦村と称する

植安

日本紀曰神武帝天香久の植土がたり十石金をとる

海人尾健土安神社

神名也二代實出下馬釣村小あり今天照大神と称す

帝澤杜

本草村小あり舊事紀曰帝澤女乃神の通称と云

哭大澤の神社

小海をくひて也

我王者高日志しれ

海人尾

都多本神社

神名也出

膳夫

安陪守り三町あるも芥つゝ所と冷水かきてより里

吉備

別業小守り大福村今小芝町生で

耳成

城あり新無名無名本不付上方小守り而田井ノ

施子

後漢志中少施子と云

施子

の所耳成をよろ興すをよび移り至る所谷にからん

耳無川

因ふ一川みか一川の河底をもあらせと人をうみは

耳無川

六帖
耳和池耳無川の延葉小あり今萬葉集曰

耳和池

耳無川と云ふも又耳無川と云ふ事也

耳無川

因ふ一川みか一川の河底をもあらせと人をうみは

耳和池

耳無川の延葉小あり今萬葉集曰

耳和池

耳無川と云ふも又耳無川と云ふ事也

耳和池

耳無川の延葉小あり今萬葉集曰

耳和池

耳無川と云ふも又耳無川と云ふ事也

耳和池

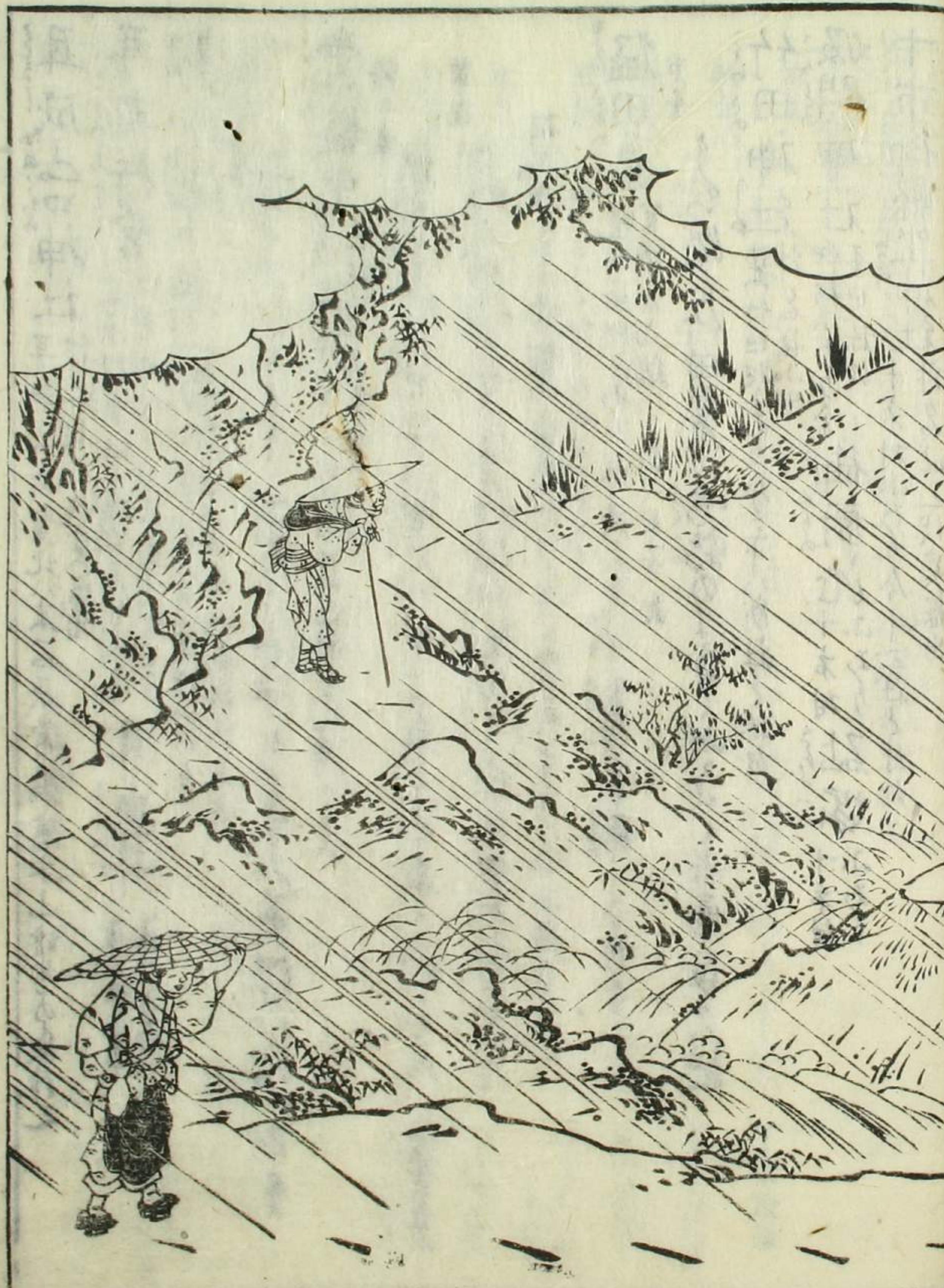
耳無川の延葉小あり今萬葉集曰

耳和池

耳無川と云ふも又耳無川と云ふ事也

耳和池

耳無川の延葉小あり今萬葉集曰



耳成山口神社 耳無山新賀北山本石原常盤葛木山諸多の及作

耳無行宮 五日行幸と日本紀小豆ノリ 耳無井 耳無山

吳代山内賤村 葛木神祠 今ハ新神と称れ

常盤里 本城國に同名あり

常盤里 内賤村 葛木村小豆ノリ

草根 いせうふひうとぞとも宮下やゆとうるす人失伴乃比 忠房

草根 いせうふひうとぞとも宮下やゆとうるす人失伴乃比 忠房

按 小撰集小常盤山常盤社をがる奇多一山城國あり

猛田原 東竹田村小豆ノリ 神武天皇八十御師反敵

竹田神社 神名社小出

坂門神社 中村小豆ノリ 御厨汎

十市御縣坐神社 十石村小豆ノリ 十八所社と称れ

笠縫邑 紫符天皇六年天照太神の神籬

十市里 二光寺

拾芥 十市新木二村の向小豆ノリ

新木 お小豆ノリと通く日暮とふらの里小豆ノリ

續木 うち豆子千石の里たかうく又千余の年ぞつてある 崇徳院

玉京 十市よりゆく風の匂ひと書たれおなじ人跡あつて 郁芳門院

夙雅 横峰とちのむれの書たれおなじ人跡あつて 俊秀院

新木 七里とく風とく十市小豆ノリ夕立乃そも

千代神社 八條村小豆ノリ今ハ藩と称れ 二子部神社

屋就神命神社 大瀬村小豆ノリ今ハ劍と称れ 万濟宮

鏡作伊多神社 橋津村小豆ノリ傳小鏡作とあり 神代小日像の鏡と傳わる

多々神社 多々村小豆ノリ神名社一位多々人明神書記 皇子神命神社

姬皇子命神社 多々社の東小豆ノリ今木下社と

小杜神命神社 称れ神名社出



促ニ位宣子

千載
宿をとく宿より云
いそげども置へ

とどちらの
やべの夕ぐれ

吉那郡東へ分川飯高郡なし紀州牟婁妻那の郷至ア西浦へ紀州牟婁妻那
伊都の郷小至御比宇陀高野十村宇智乃四郎
化那小モノノ度大ナリ

日本紀曰 神武天皇吉那郡至ア是人時光あり

井中より生る人あり

天皇之役反向々海を仰ぐ人を對く白臣と是國祚うり名が生光

とくとく則吉那首部の始祖うりとぞ

小川瀧 吉那郡小川莊池村小あり高見とて築か處す志國極小

小川瀧至ア右那川小入

洛陽清水寺舊址或曰本津川口吉那郡御前村の小門より左原小瀧あり
の舊址今小あり小路中の延眞院洛陽清水寺觀音寶物の地ノ如ク觀音堂

又傳御前村本津川とあり釋迦堂本津川の上金走乃木久松

又傳御前村本津川とあり釋迦堂本津川と云ひ也

高圓寺 小川莊平那村の東小あり旧名え角山とくとく

高圓寺山頂に至ア五十餘町あり

天狗巖 獅子巖 冠岩 え見との山

高角神社 え見の山の巔にあり一產と云耳村ふや

蘇山嶽 麓谷村小ありふ岳ちく聳

龍門山 山林遠く望めは蔚翁とて書く

懷風藻曰葛野王

遊龍門山 命駕遊山水長志冠冕情

龍門瀑 龍門とふや 龍門寺址 義勝院正の構造

伊勢家集

屋宇と小舟とありとふはくあくちらうとせんとをひくありきり

少すとひとりふはくとし月の十日ありふと有々る方をひく其の
たりのありと無聲をまの中へうたうるゆふるねいもとくとくお

く年つりく、ものう乃まもむひーくりあととこたくとくお

く洞あつたとくおとくほとくもくらんはふたびひよくとくとくお

わくとく宮古島をれでいのとふ志が一からむくふけますいまく

らううりぬ雨やあんとまくとせりふわん人いしたくはな肉と
あーあふとゆねふあこまむかくうくうくある人く
りと寄りあんとえんば

たらぬとゆまきへもうんわがうふの照の布さめん

古今集小山の寺が黄葉とくらう或說云ゆら井のやとふら龍門

後拾遺

く教へれどあくの戀の魚があれりく小枝をまくらひす中納言定頬

「ひの日龍門」まわりく歌のりくとくの圓はゆる事志

千載

ものゆゑ思へとむか極のれいく世へくる歌乃ちく余 無乳母

龍門ちくゆうて化室にゆきつけたる

名寄

あくの小枝くわくは扁うととむくほきをそらへ谷風

夜不活拂

は 仙人のむくれむくは扁うととむくほきをそらへ谷風

夜不活拂

空

空小花りけり 〔全文高石那久本の下〕詳より

顯注密勘曰

はあま大和龍門ちの龍小からううのちうん假窟の窟ゆり
今昔お僧

むくねん住へり龍門のゆことひつてくら

とくにわたり今天外と称はれ

出

むく久木とよきの吉野那龍門寺ふくとり法なり今くじとえり

吉野

山口神社 勢子村の氏神也神名帳ニ代冥保出

龍

龍門溪 あ源龍門よりかくまく佛師院印あり

未立碑不善モ吉野川小入

寺山門と有る

高

梓神社 龍門山の峯小あり今礎石等とく

土人云れ水彈正の

龍

龍門山城 沖矢治村

山城とく

龍

龍華臺院 平尾村小あり廢弛門ちの

寺院とく

鳥

宿山城 小あり

大所村の北

大

所溪 龍門莊裏御のふ中よりあぐれくま

入

龍

在城 小あり

勝利村

大

名持神社 姉と小あり六門不勝村小福は境内小大海寺うり社本小瀬生倒

めり毎歲六月廿日廟が涌出に邊村共一村の氏神也神名帳ニ代冥保出

於達

たかがももくうる神の坐す一株古のとがかると帰れ人唐

吉野山 一名金御嶽 又名金峯山 又名國軸山 菩薩曾天皇佛生國
の山也 開うゞく巻末にけどとくらと自藏子の傳すも古くよりノ乃
競馬と通うる五峯と此峯の端也 今を小參一乘者ともりア
江中納言のひき所塔の碑額文もかく記すれどて貞崇宗碑所古
を稱す小金峯と云ふ金剛藏王の住持ひゝとあり其山こそが龜
来りし金峯をよしらば我ままでり拵志野山滿櫻樹みく
花時と積石の朝比山 磬人墨客多く遊賞へ其名中華小室
て天下の名勝なり蕉信翁曰真小額もくそん名匾うるが
金峯よりすと義楚六帖半二卷目 あと又アタマり移すと金峯
すくも圓へるまと記すり

万葉二芳序の下風のをくふる幽やかにすれ我獨り極ん

古今 みよしめよ下さる極花君のをあやまされれり 支那

古事記傳と云ふ一通乞れと一日とみ若くの日もか トメテモ此

拾芥 又アハナあわす小宿もうちかうに財力源氣が少んまくも此
山也

金葉 渡船者 いのとひまを零の匂をまかすかうに財力源氣が少んまくも此

山也

松花堂 まきうめくかくうらくいはとくくもくもくと 附画五

松花堂 吉野山やうく半と身を花むひと人や竹さんあり

山水隨臨賞 巖谿逐望新朝著度雲翼 夕航躍潭鱗 丹墀

放曖多幽趣 超然少俗塵 楠心佳野域 尋問義稻津 廣成

余は小舟とりてともと花やうくのと 奥德

おもく花の上うる月夜、う耶

とまく

懷風藻

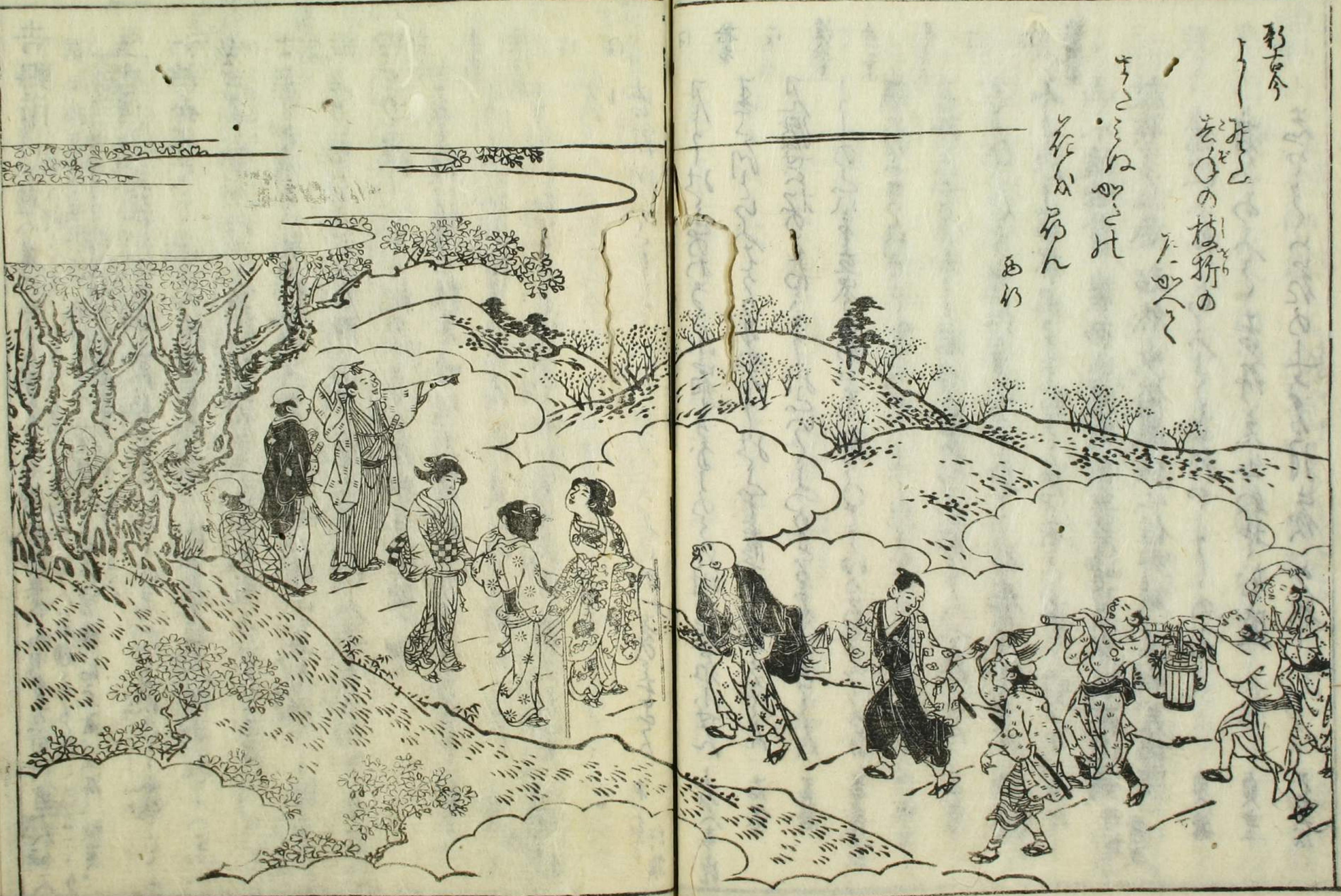
春

おおど
の松原の
たゆく

まこと
ゆき

花がるん

あり



吉野川

み原大基源よりがく。瀧葉伯母谷。和田。多古。白川。猪。人船入
國施。檜尾分屋。茶葉摘村に至て。茶葉施川。とく。官瀧。山本。立岸。飯貝。
上水。六田。土田。下新住。分經屋。一く。香川。小入。

和州巡覽記曰

吉野川その水上分筋をもむづのち。行く萩の下。病とよ

わゆ。舟のまく流る。一所よりあく。はとせり。御風。うへ。東一

きどき。かく。はとせり。宮川のあく。すく。東風。うへ。を吉野川。乃。あ
まう。小風。うへ。熊野祭。あく。うへ。と。少。故。小。あ風。うへ。け。と。そ
れ。うへ。く。も吉野川のあく。うへ。と。上。あ。うへ。ト。と。お

ワ。うへ。度。一。ホ。紀。の。川。うへ。紀。州。和。安。浦。一。生。

古今
新義

うへ。北。の。岸。の。数。を。吹。風。小。原。の。船。うへ。ひ。小。入り。貴。之。

後後撰

うへ。の。船。は。岩。の。舟。花。を。お。ひ。う。ん。船。か。く。と。も。

和陽門院
誠。お

日

うへ。の。船。花。と。櫻。嶺。小。入り。岩。うへ。く。花。の。舟。を。

老翁。喜。入道

日

うへ。の。船。花。と。櫻。嶺。小。入り。岩。うへ。く。花。の。舟。を。

蟾。大。池。云
仰。撫

猪

養山。上。市。村。の。川。櫻。嶺。池。田。村。小。入り。

別系

ゆ。か。く。り。の。わ。じ。の。小。室。無。畫。う。人。船。と。圓。う。見。さ。

本善寺

う。良。女。の。船。は。岩。の。舟。花。を。お。ひ。う。ん。船。か。く。と。も。

万葉

常住物明應七年二月

實如書

を。と。く。く。も。

芳序

心。と。み。き。う。川。つ。な。ま。そ。も。か。今。や。室。ア。一。般。因。蓮。如。上。人。

六田淀

う。の。六。田。村。小。あ。り。吉。野。の。船。小。う。所。櫻。嶺。の。宿。と。く。く。

傳後卷

う。の。六。田。村。小。あ。り。吉。野。の。船。小。う。所。櫻。嶺。の。宿。と。く。く。

吉野水分神社

う。の。吉。野。村。小。あ。り。每。米。四。月。吉。野。と。祭。事。う。く。社。大。う。く。

六帖

う。の。吉。野。村。小。あ。り。神。名。代。寅。派。小。出。

行。急。う。る。う。れ。と。と。あ。湯。の。神。に。う。れ。そ。く。を。と。う。く。

嘉慶元年の坂。と。く。く。正。の。樹。一本。道。の。坂。と。く。

こう。り。と。く。

三芳序

や。樹。一。本。小。先。う。と。く。と。古。志。序。向。人。ま。う。ち。

太翁言
雅章

四
掛神祠

七曲の櫻

芳郎より花のゆにてうづぬもかこと神の心がそーり

大納言
進章

多分と供奉小僧はくらへん平和とうり

瓦葉

神さるうさ子已凝敷みす一時のみかくらがむらの華

新後撰

二芳郎のあかひの櫻津瀬もホトヒの門の流えたり

高麗法師

丈山一藏王堂

ありそが長嶽といふ

長嶽薬師堂

一藏王の

文保二月廿八日豊臣秀吉公右衛門

長嶽遊行のうち走るなり一時東をのれ

けやくりて其時の所取

千本櫻

橋とアリ

嘉慶紀

吹はゆくをいひと春霧のあす小向人花の春風

大納言
雅章

富士もお花一時乃ト一のや滿

鬼貫

花こうりとお目まのれほとも

もとみ

日本花

橋と一面小石とくらべ

入

入

入

入

入

入

七曲

足より多武峰の御宿

入

入

入

入

入

入

花の

橋と

入

入

入

入

入

入



御室花

櫻山樹

友井坂の

金鳥居

額額を登心門心門とぞ一弘法大師の手手より
千載千載金の手手を承受け取るり

爰爰らむひの曉拂等等の御御不不との園園もて御法のとうひ

奉奉教光

二天門

金剛力士の二天門

金峰山寺

六田より攀登ゆる

本堂藏王権現

佛量

二丈

脇士丸

觀世音

二丈四人右弥勒

二丈

役行者

遺像

分安坐安坐に足當

の御基

あり其外觀音堂講堂僧舍四十一區

吉水院實城院トヨシキニと俱ともノ

後醍醐天アフタガマの御官おんぶへ大塔おほとうの址かと本堂の西小礎石おこいせきあり兼あわ替かわ三年

十一月金峯キンブとの塔供とうくうのうの釋迦セイカ二尺八寸

藏王権現に定朝テイジョウ調しらべ進すすす

柏大殿カシタカの上小啖合こうだんあく大床おほのゆより底そこへりと藏裏記くわらじりける

又貞永ツバメ年正月十四日然後アフタ御泰武藏タケムツヅク御直タケムツヅクあまの所アマノシ小帝コウテイと天

の奥賀オカ名牛ナミウの名な小鹿シカにせらひセラヒとすと煙拂スモリとく皇后コウゴウ卿ケイ

相あい去客スルの宿所しゆじょ小少コトコトタケシマ太タケシマタの金カネを右金剛力士の二階

の門北野天神社七十二間の廻廊まわらう三十八折さくび小藏王堂一時ひととき

アモトアモトと左平荒ハラハラ小少コトコト其そのより年経と豊臣秀吉タケミヒロシの時

諸堂よつどうとく成就せいじゅとくせり

威德天神社

本堂の右まぎわ昂北野天滿宮アガハタノヒマツノ天慶元年八月

一日日藏ヒツヅク上人金峯キンブとの岩窟いわくと威德大政天カヒツタカヒツの信しんを小少コトコトなり

神勅カヒツ小少コトコトとびく營神エイジンの濟仁所セイジン小至コトコトと經ハシくの神語カミゴ公蒙コモて我名ワタナベ

と唱ハシく事ことと信しんせばばとくとくに擁護えいごととと示現シレンありて上人じょうじんを

金字キジンと小字コトコトア當社公造立アタマサ威德天神宮カヒツタカヒツと纏まつめせり

釋去小少コトコト千躰地藏尊チヤウジヤウ阿彌陀佛アミタボの化かみみ天神社の信しん小

あり又稻荷社イシロ天黑天アマガタの社あり四本の櫓タワーの藏王堂カシワノ乃ナア

ありて大塔宮タカタノ御ミ舞樂モダク公奏コソウタヒタク所カと

四本のこコと小跳アタマサ舞樂モダクの興アリひ生スル

ありの場カタマリとすと若狭ワカサの西本シホンの橋ハシをまく下アシて

左岸シナガワ草

吉野と六田飯圓より
大峯小篠に至り

新拾

久人山

門波子

みよし

六田丸

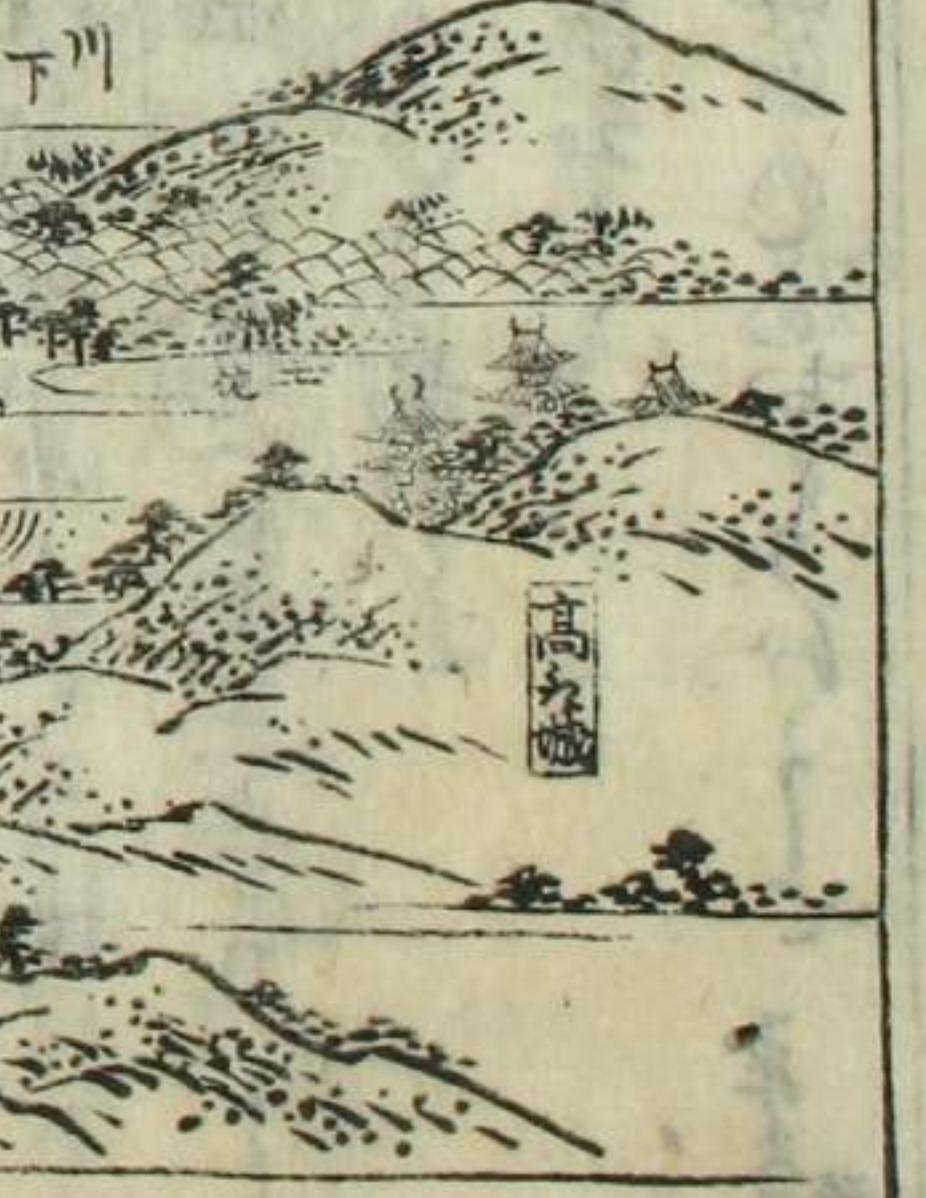
淀の

八月雨乃

義詮



上方川下
あがみかわ
くわいへや
まほゆひかわ



千本櫻

日本之花

あらわ

傳千載

うのと

冬の危ふて

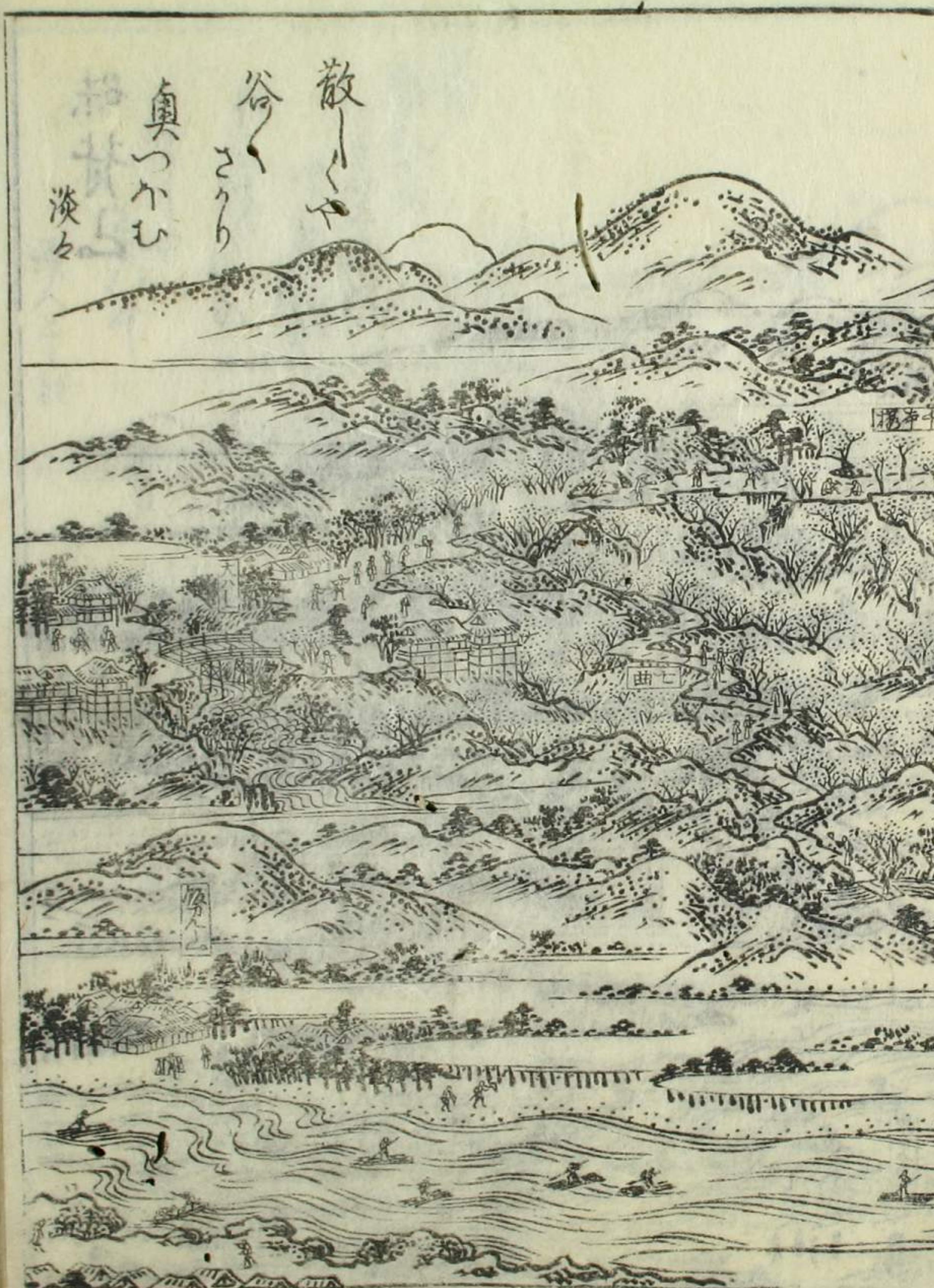
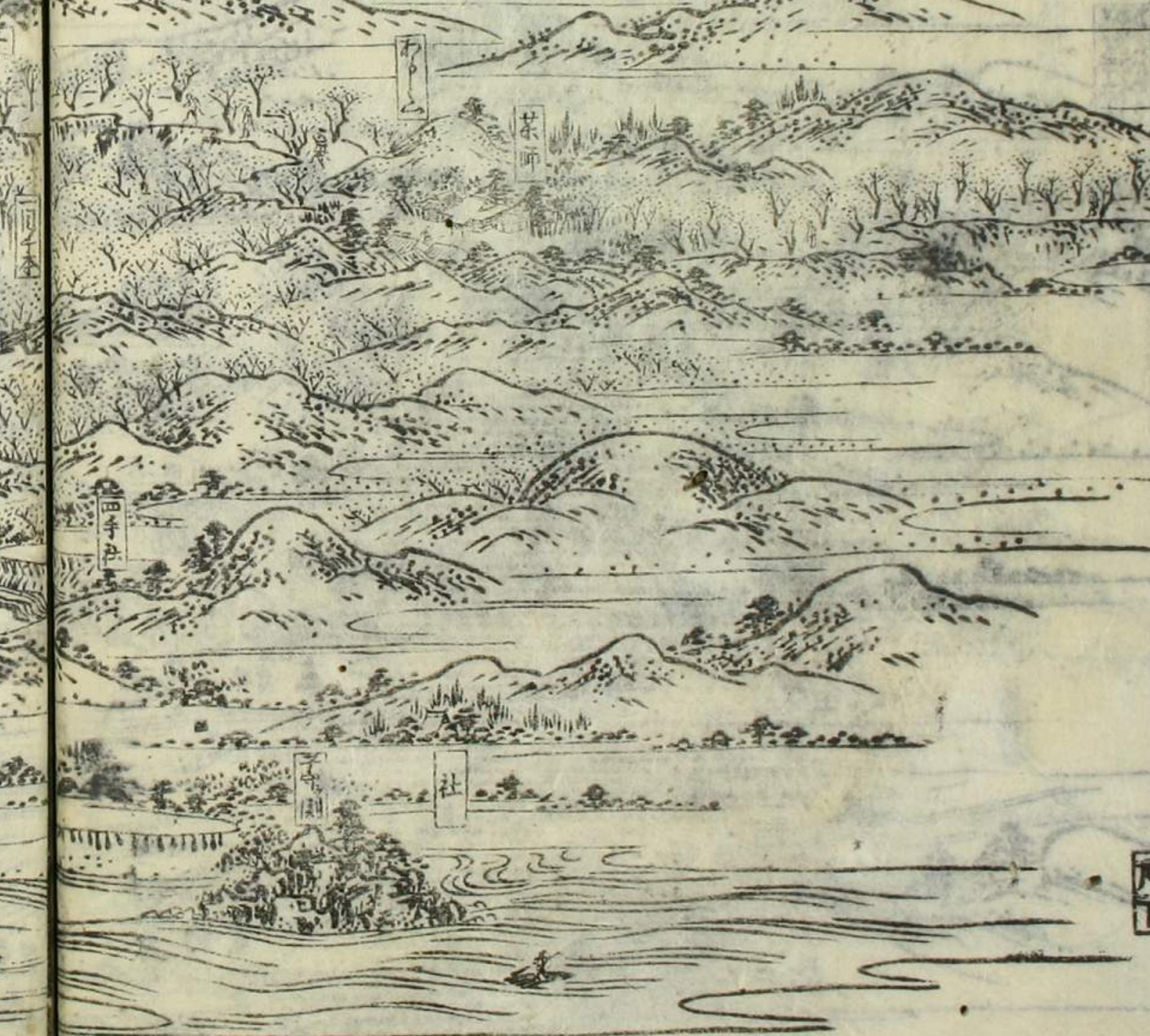
り居の

つよこ小

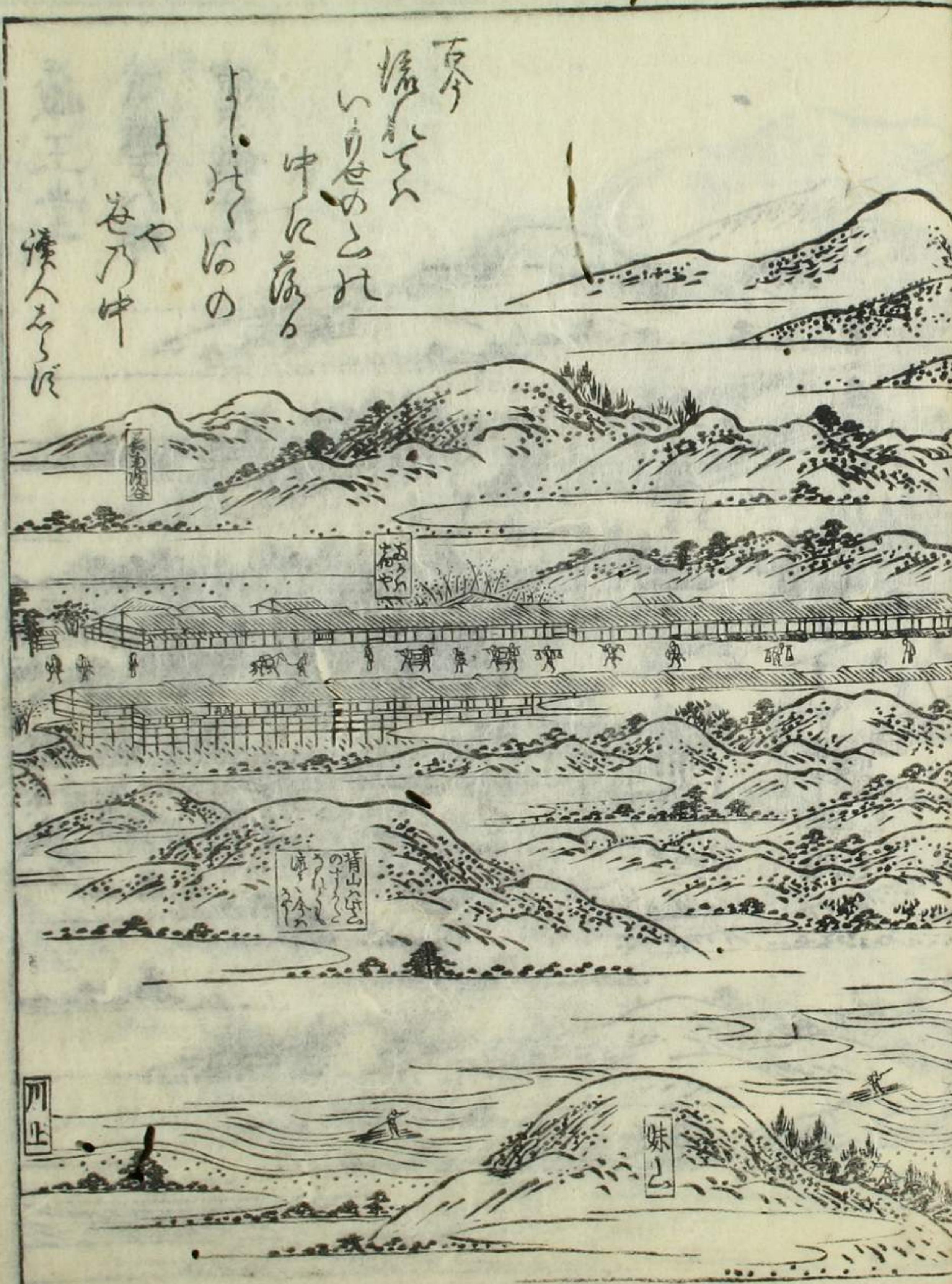
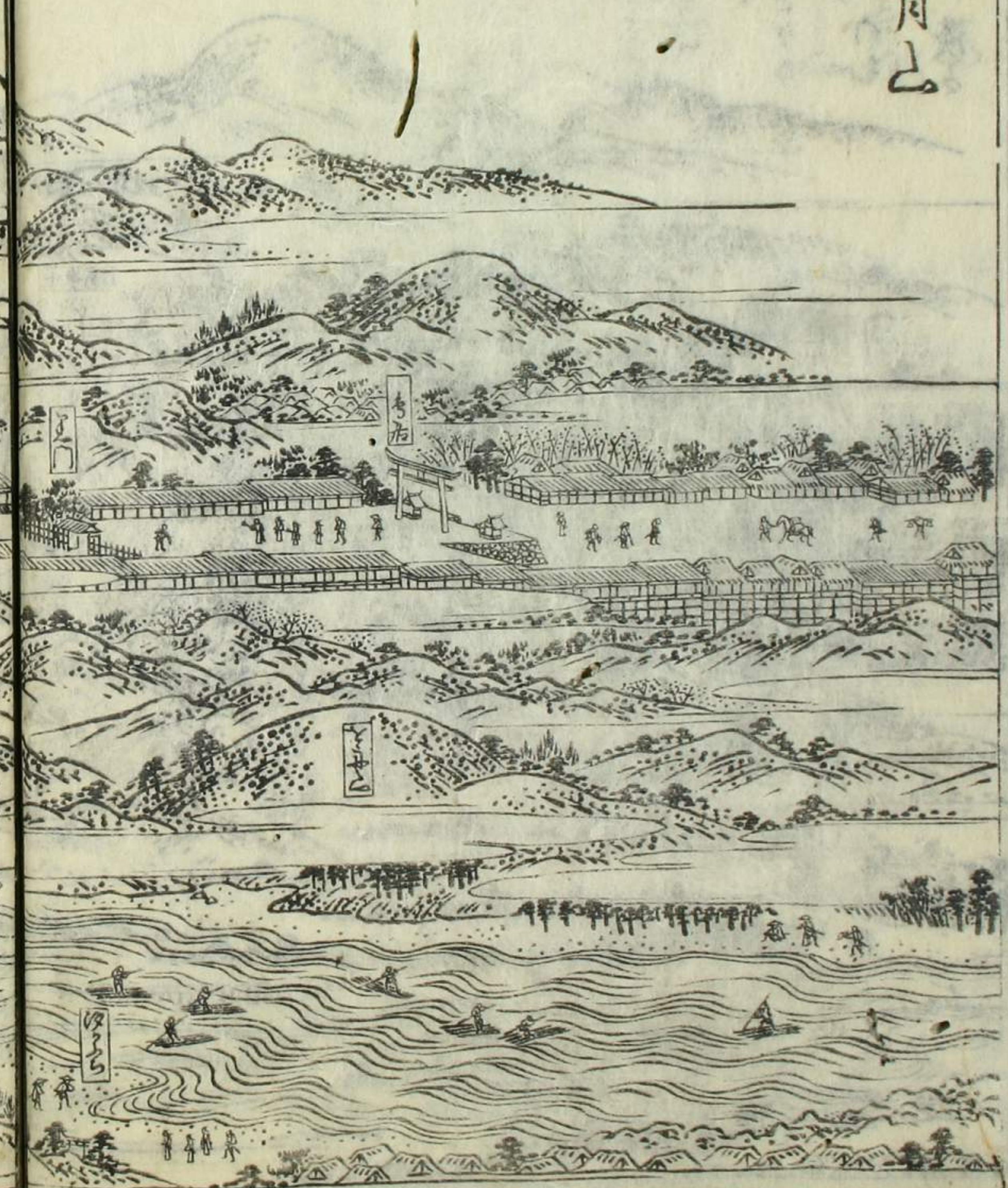
かほ

牛宮

花のまくら



妹背山

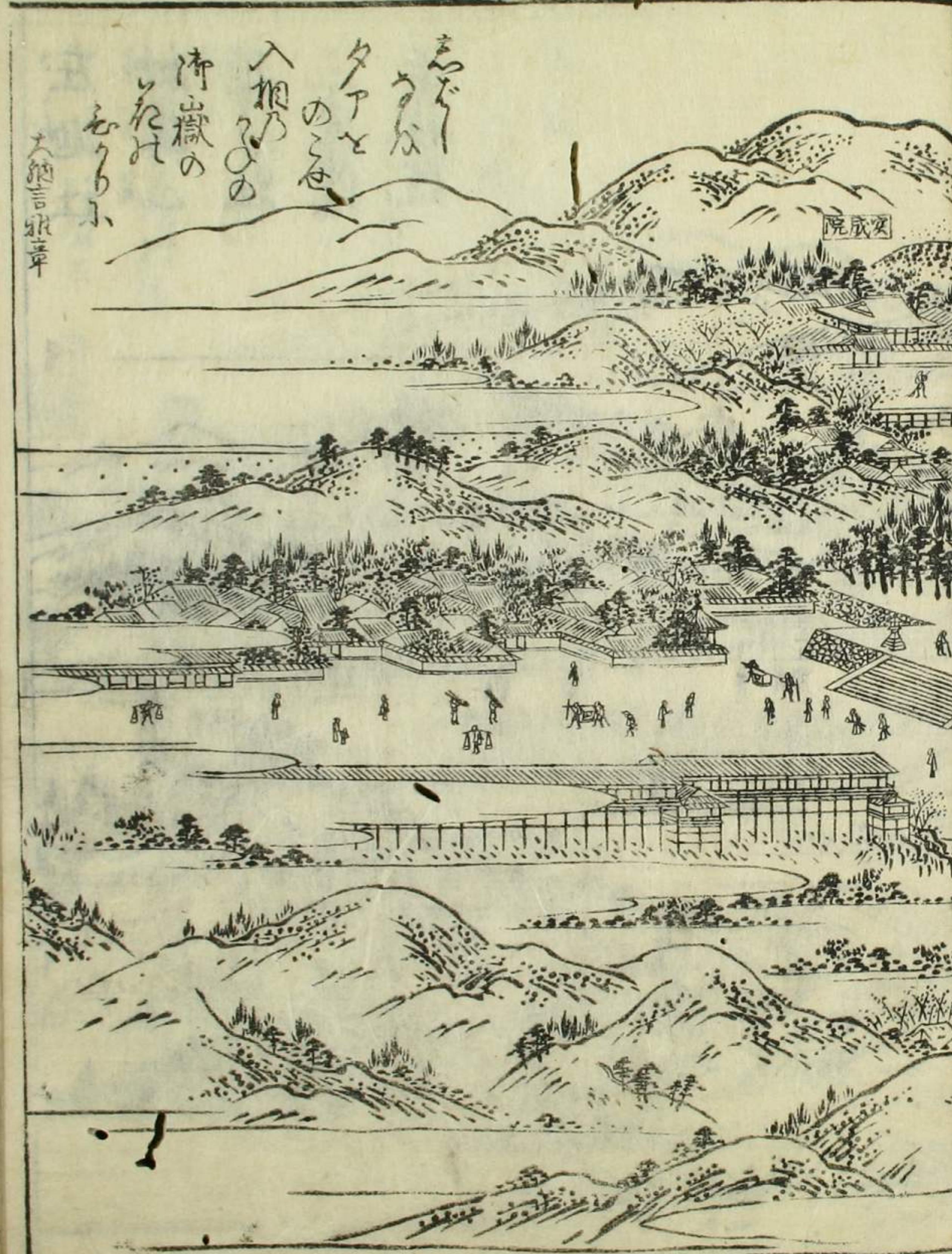
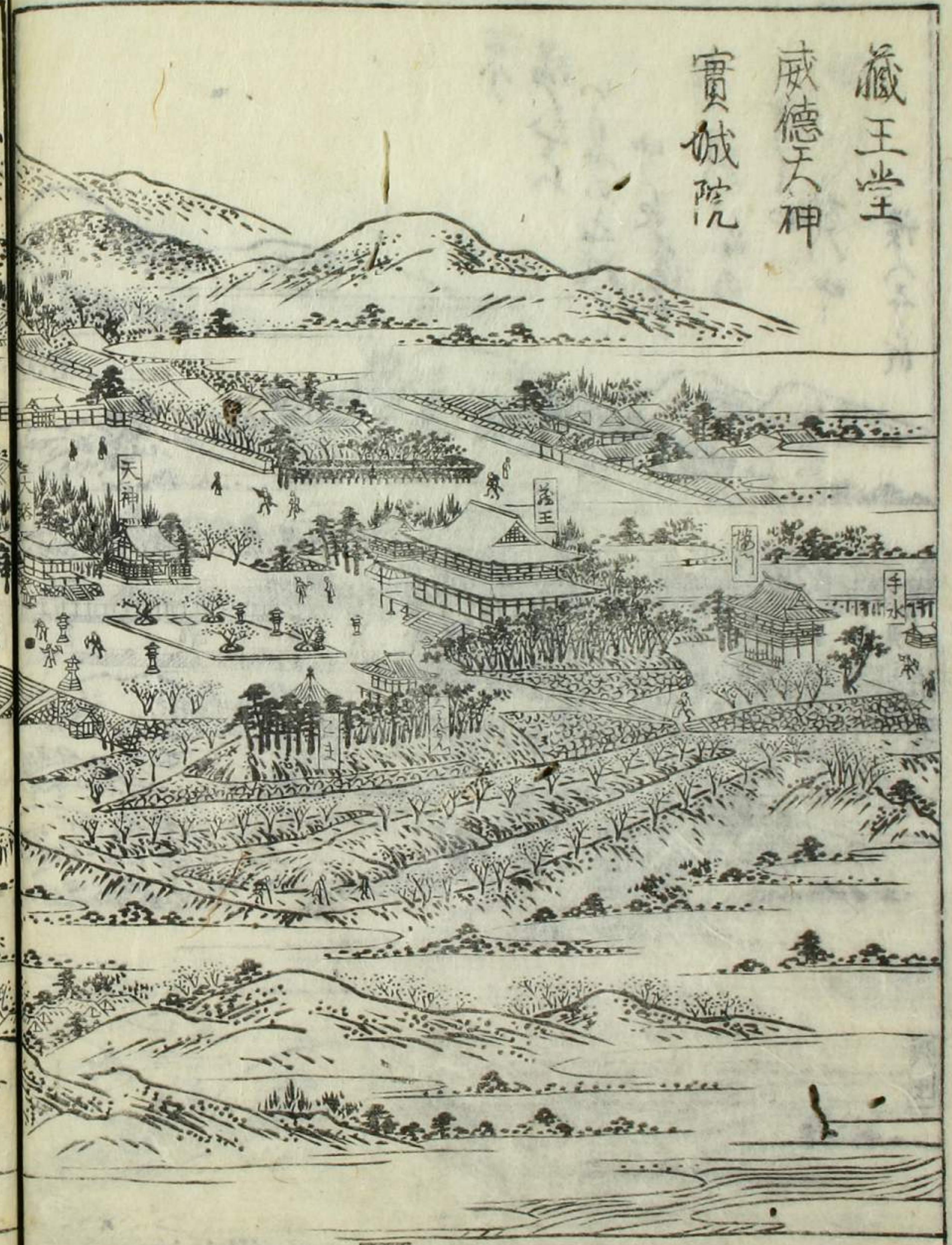


藏王堂

威徳天神

實城院

上川

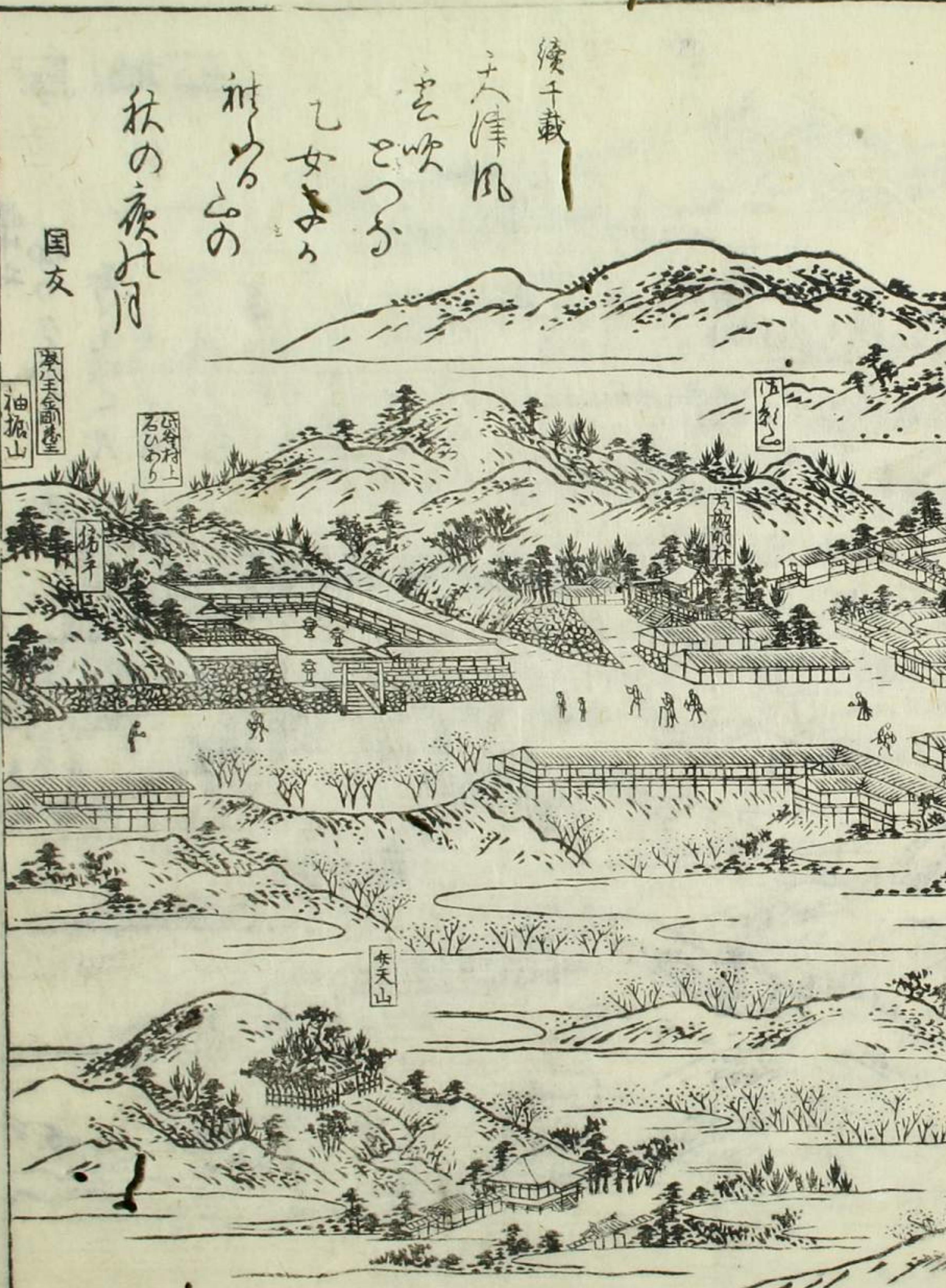
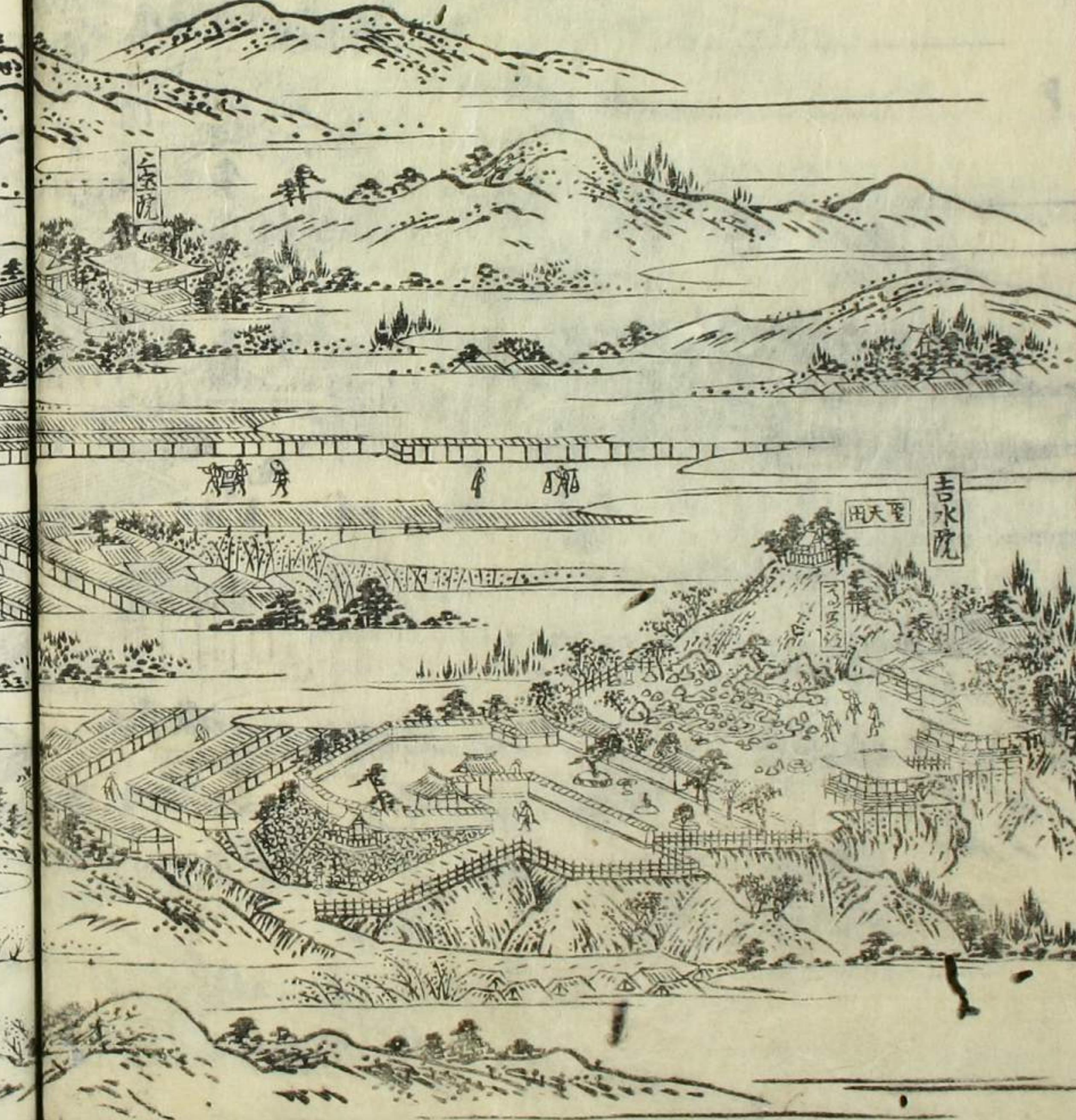


左
施社

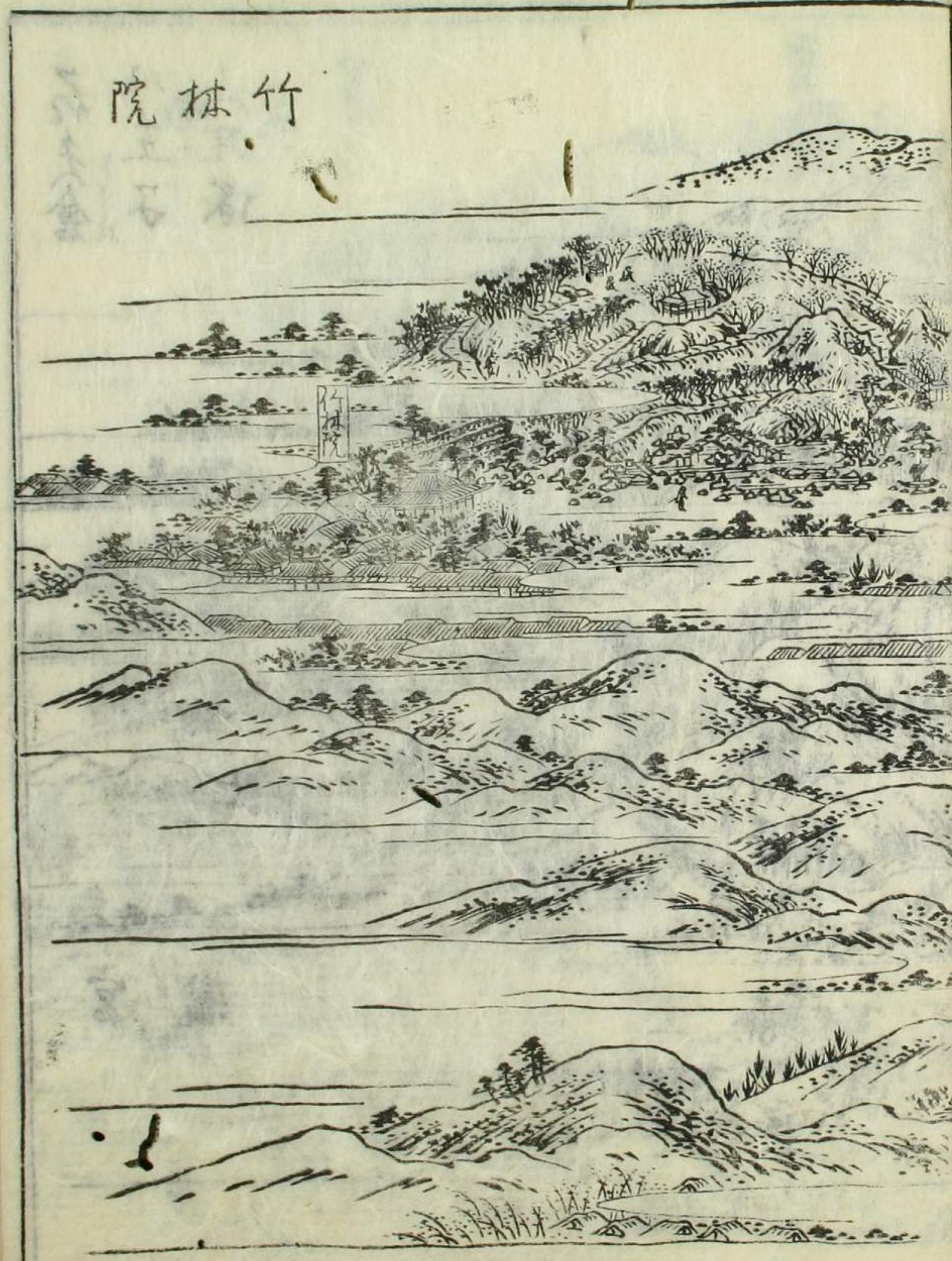
神振山
猪手社

之宝院

吉水院



院林竹



鳥栖山





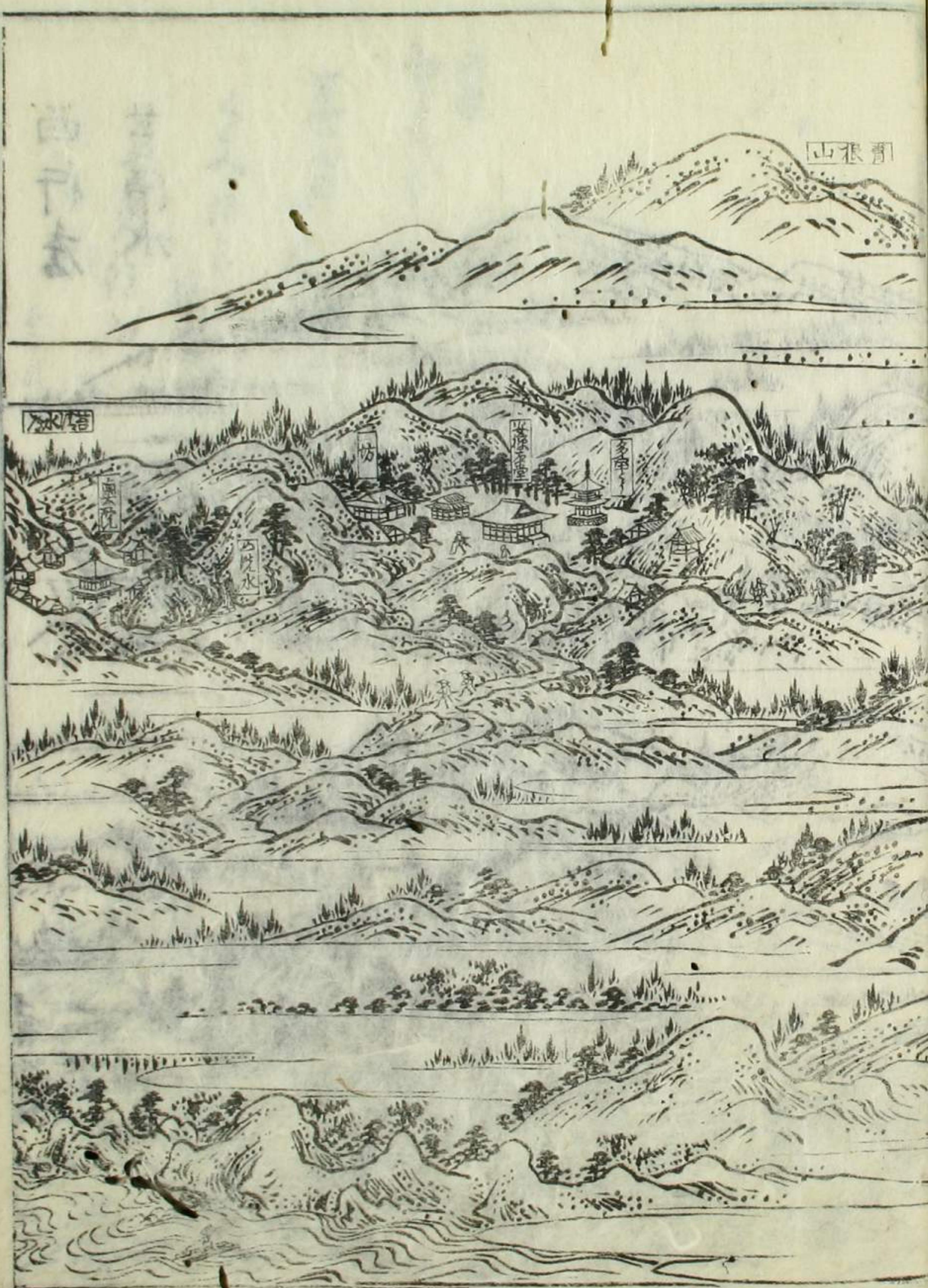
子守社



金精大明神社

安禪寺

奥之院



西行庵

苦口清水



清明瀧



大峯山上嶽

後古今
大峯山とがる

七度の
すくめ川乃
みかづく
そよぐふ代の
あそびともうし

傍詠の意



芳跡賦

ト一聲が拂去せといふ皇居の迹うとす。川里巖高根尾上との井花園と詠と。もと二十二代の御教三百七十全首。お家くの集。わ宿院詩達俳諧ゆゑひ。佐川田堀六郎あざれく。内室老人のこれらくやくはふゆくいふゆく。さりはもほこての志所く。お門のりうちきみの能猪の奇うりそす。芳野川花の事をもとく。慈徳和尚のちきうり奇のと極うり。月と巴が御よりつれく。余の和あとふ處。とて大安寺よりつづく。那智る群山つらうす。藏玉堂をさむらう小安平。一郡とも郷とゆ。上帝よりの御賄へつて下。市ひなえて上。田よりの空。株肩とて度。高麗の城小じく。ちととの探。日暮花。櫻田の谷。さくら嶽。園庭乃花。壠をとま井桶。布引の機。花々倉。花織の名。肩とて。龜の井。宇小都小うけと。社殿と。天武寺より五弟の跡と詔。萬方余の

天子の國極人の舟ふくし。後醍醐帝告水院と皇居アリ定む。義経院やどり秀吉もせまひ左陣と。賀名屋る要害乃御所如意輪ちよ拂廟と葉。厨子の戸ひく。小南帝勅化の詩が三川くわそぞ。過去帳の奥と。樟正乃と。御の奇と。む判官の鎧。毎慶子守。口のこに。金麦四つ痛腹の所。つづり墨を忠信を。腰乃丸。勝の宝藏。殊の舞の紫赤と。病ひ。子守のわ殿の奇伝。定家片真蹟炎上の後醍醐。根本の宮。金情の明神。力乞の不動。と。モヒ藏。ちの御の御教堂。と。それを供養の縁がゆん。ス甚す。機を當て。先達也。大龍宮。龍。あらの跡。ち游。跡が龍。清明が龍。ササギはみ川。少くの湯。外象の橋。神子のみ。然うの原の龍。龍玉の裏。石。玉石。大根石。人丸塚。お桑の多井。禮魚のね。つけうへ乃。小用。猿。坂琴堂。琵琶。おも根。根。根。根。釋迦。樹。七十二うい。牛の窟。され皆順逆。川の通路うりぐ。春く頭巾。ほどの因。火。お塗物。

延尉源義経公の愛妾
静御前が猪俣の神いんじんあ小て
法樂のおほお奉まつ衆徒
のころと蕩おど義経主
従十二歳じゆと歲とは詠よに
刃ひのこを用もちて勝かつが冷さく
よりへ六韜文代むんだいの篇ひん
奥おくとえいしつき
ものれ



實城寺藏王堂の乾の御、又ハ金輪寺ともいへ建武二年より後醍醐天皇室居小さざんらす北朝と南朝とあつて至る號也兩劍（北）を出でける天皇勅（北）を新帝和氣集（北）を定め給ひ又は十二年入十二年を定め給ひ或ハサ一世小金輪寺とくぐれ之流器（北）をもひるぐ勅化（北）を付とく金輪寺おひりらひとくま湯みもありとく南朝四十六年のる白居居の地（北）正門乃白居が化（北）もと其促（北）殿屋（北）繕（北）常の御座あり帝ある所やまうりの事無事無れども

御小造り御事とましれぬ右所のちくは八月雨のを後醍醐堂
様笛一管文字鞆笙二管國軸丸羊皮鼓一面後醍醐帝の愛物
雲書南朝興國二年北本唐新帝後村右所と帝都とそりとく被官殿閣（北）御を客徵（北）と昇進除官階斷絶（北）於是二月下旬源親房常津小田城小居（北）職不就二卷と作く右所へ

歎（北）せむ高官諸位職掌（北）が持（北）未代尔至（北）帝都の龜鑑と
いはて観房卿博識宏才（北）今東國小左と文藻一體も
不從（北）して東（北）と云著（北）の只凡庸のやうと訴ふあんえ云

吉水院藏王堂の御の田より當院後醍醐天皇の御事とく建武元年二月の遺券墨文あり又正平弘和元中明徳の年間より賜人所の繪（北）乃び鉢筈首井順慶等の頃丈あり折けちのを創る役行者と上修行の時姑息の庵室と其後醍醐の聖寶等解めくに蹤（北）かくめゆく加之源よ兵乱も源義經每度もくと小鑿（北）車蓋と謀をと二年小乃く其居所今に破壊されをあみの足蹤武藏坊が力針今小舟の形を遺れ付昔文治元年源義經大人物浦より風波の船分のぐとくふむり夜に入りてそくしづふ入る古井法師考義經公討をさせり又丈丈丈出中院谷小源と一木通徒をうふも源が求まつてを佐尼

忠信が油一と防矢が射さざるを捨て多武峯が津を有院
の内後室の十字坊へ入らるゝより又後醍醐帝東耶が逃
走せむひけず小僧をありて附身院へりす。あくまに御宮
と。後小實城ち小移ア移ト附身院の本が拂枕へくよ
経ひ一附身は

衣下宿へりや右森の下ふ石へり行者

後醍醐天皇

近世豊臣太閤も右所衣下宿への附身院に入りせりとあん
駄夫とひりあり船の手を左小あり一歳小奇にうらむ行者。のま
續後卷を

ス墓寺 櫻本坊 共小燈爐辺より右の方小あり大寺當との所也小
佐波明神祠 吉野大社の拂衣院門跡の殿舍あり

佐波明神祠 内 佐波大社の拂衣院門跡の社地と村上義隆碑勝の奥 小あり

芳舟と鹿立の下なり。船の手を左小あり

雅章

古事記小豆主の神社拂衣院門跡の所也

勝の神祠 通の右小あり太官の宮の御神社愛鬱曼令人より大孫嶋
院の附世二神相そひてある。すりて足護國後見へり。のゆ
世二神より六十四神式小日愛鬱曼令人勝の大明神ありとぞ又文治
元年葬法樂の神と呼べ。松本うちび小源義教なり 鐘かね あや
寶藏小おこすれど巡後記曰。是本體也。正保の又後醍醐帝賀名生
の迎よみ。すりて小勝の宮のすへがつをせり。附身馬より

ありてせぬひく

太平記

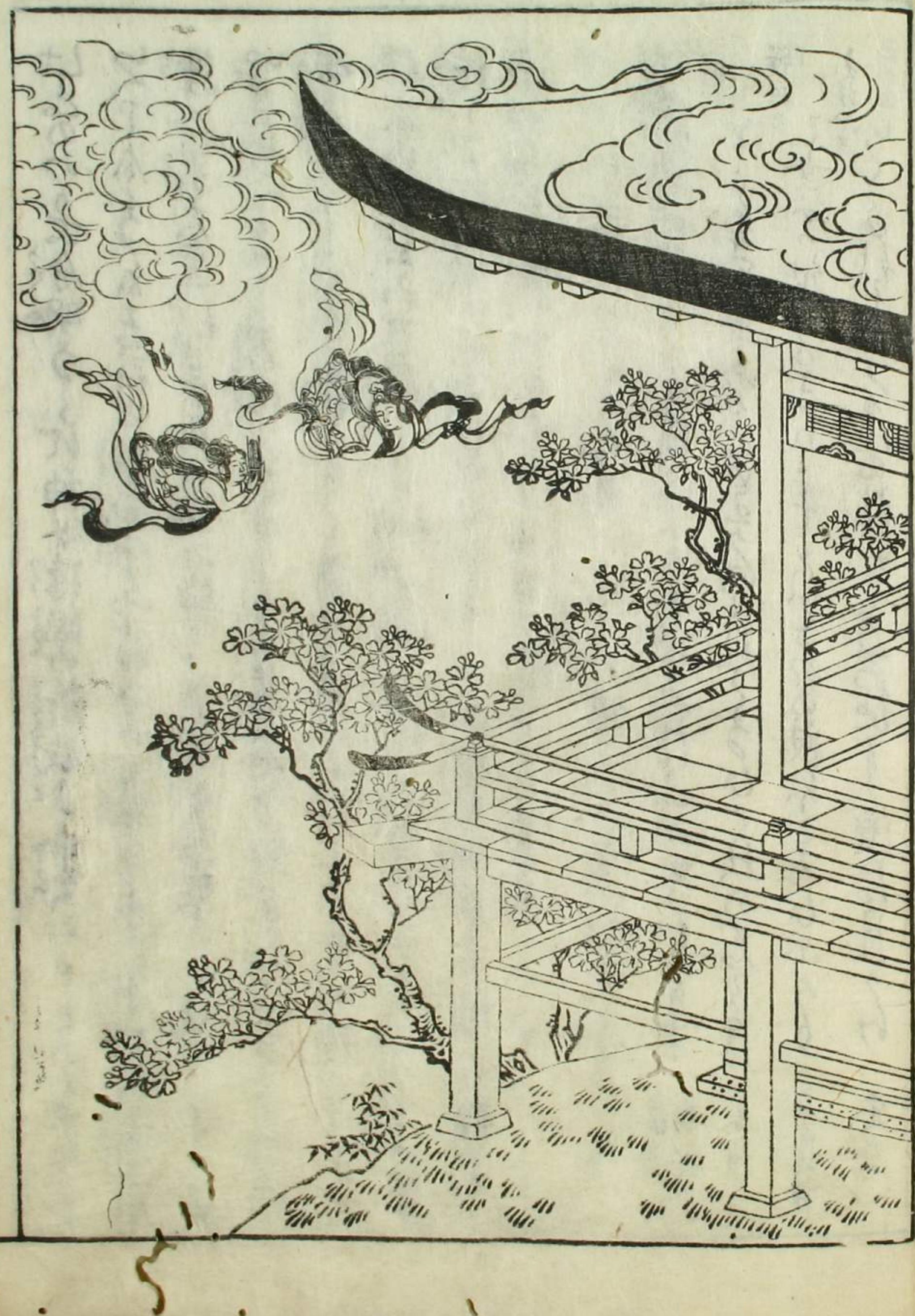
小指

勝の神祠の御神社をキタリ後醍醐天皇
御兼手指
神振みづき 有小所矣。たゞ神振とけよの巖と那良志ととくんとてせきふ
書くも小哉。万葉集みつ石上とよも小書拂おつとも右所小あり
いへ泥兼卿の類聚みた勘國ありひ對馬國とありあらひと太和國
布留ふる うりと詞林採葉ことばのさくよう わづとくらむら神とひとくわ

津乃原天皇お坐の御宮と
琴が弦くげ一々ひとひ天人絃てんじん一

曲小魚くわい一ひとおねひきり

それより神語かみごとぞ



しきのわらふ分明うじて神女御臨の所城より來あるとのありと
りアリテシカ古御の袖振そでふりとづけの古旗こひきが求めたる日令當
津浦原天皇天武古御の宮小浦こしらべにて日暮ひくい小琴ここと彈ひた
ひと車くるまより空そらを忽すこぐの峯みねより氣き鼓の神女かみめのゆきちうのり人
警けい鑑かがとく曲まげに應おことくあたり作つくのへんぐるの分ぶん辨べんと天乃
羽衣はぎの被ぬかス音おと観くわん河海乙女めのこみづとくわざともくろとく分
被ぬか小すなくとくわざともくろとくしげとく入いり算さんの意おも乃根元ねもと

袖振そでふりとくとく時ときよりとをとぞにす

拾あつ

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

傳つた後ご

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと
續つづ拾あつ是これとくめの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと
是これとくめの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

拾あつ

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

傳つた後ご

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと
續つづ拾あつ是これとくめの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと
是これとくめの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

拾あつ

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

傳つた後ご

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

傳つた後ご

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

傳つた後ご

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

傳つた後ご

乙女めのこの袖そでとくの鷺さぎ觀くわんの久ひ世より名な初はじくさ人ひと

傳つた後ご

記

左下

釋玄記

後醍醐天皇の陵地やより小幡が手本極と書ひてく

被とうに苔の下すもよしの御事のあらが在り候るん

審査朝臣

楠正行、佛廟小路へ封化の御殿をかとふとすく如意編ちのひき帳

小楠正行、同正時、同將監和田新發意、同全室等新造請同紀六左衛門

良田

各留半座無花臺

待我簡淳同行人

とそんとそとそと人分れせんじくの蓮のうわが船へく

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國と

正行

泊船集

戸ひしはおと今小あり

戸扉寶庫山

名あきよとあくす

後醍醐天皇みぞとおふじ

とそんとそとそと人分れせんじくの蓮のうわが船へく

ゆうとそとそと人分れせんじくの蓮のうわが船へく

浦廟年が涙くまぞよろぬとーのび川

支考

寺考

卷唯憾如得王烈之抱犢山之石
室へ一書ふ求其東也敢非傳之
文史聊以幸遺命而已

寛政二年次辛亥夏四月

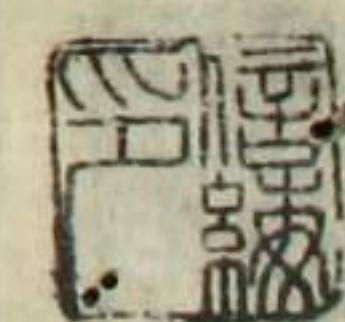
玉あ一軒里章福湘夕



畫工

浪花

春朝齋竹原信敏系



大和志

井河先生著

全部八冊

大和國名所大繪圖

大和國名所大繪圖

此圖ハ南都の神社佛閣町小移と稱す此圖法本より之絵圖より一枝擇全一冊

南都町圖

南都町圖

此圖ハ南都の神社佛閣町小移と稱す此圖法本より之絵圖より一枝擇全一冊

大和巡覽記

貝原萬信著

やまとをめとま道枝折

此圖ハ南都の神社佛閣町小移と稱す此圖法本より之絵圖より一枝擇全一冊

寛政三年辛亥五月發行

京師書林

小川多左衛門

森本太助

柳原喜兵衛

高橋平助

浪華書肆

